

武装

6号

青年共産同盟機関誌

武 装 6

青年共産同盟

戦士たちへ

死者は今、永遠の生命力を宿して甦えった。自然発生的全共闘運動の屍から噴出した怨念は、一〇・五―一〇・八東海大反乱となって火を吹いた。

革命派全共闘運動の一環として、東海大全 学行動委連合は、アッシュヴィッツ体制を粉みじんに打ち砕いた。一〇・五遊撃戦の貫徹による右翼IIガードマンのせん滅と、それをもってする一〇・八学園人民戦争の展開、ここにこそ、遊撃戦と群衆戦はいかなく結合を克ちとった。準治安軍II機動隊は、数千の「怒れる若者」の前に何らなすべをもたなかった。

この闘いに象徴される革命派全共闘運動の突き出したものは、余りに巨大である。

何よりもそれは、その運動展開の過程から、新左翼との決定的、本質的対立を顕在化させた。各学園における新左翼の「責任ある主流派」IIカンパニアの主役・中核

派と、その追従分子に対する「武器の批判」の開始がそれである。

同時にそれは、戦後型体制内的階級闘争を担ってきた一切の既成左翼と、その補完分子たる日本新左翼に対する解体闘争の宣言としてあった。

反政府闘争の、街頭における急進主義的補完物としての新左翼の歴史的本質は、いまや、革命的権力闘争に対する阻害物として、明確に自己を表現するに到った。無力なスケジュール・カンパニアを維持するために、ロククアウトに屈服し、なれあい、のみならず、それに反撃を加えんとする革命的部分に対する反革命攻撃など、その典型であろう。このことに関しては、多言を要しないと思う。

職場・工場においては、更に明確である。総評・民同に対する「口先の批判」と、実践上の癒着。彼らは、ますます民同の「しり押し」部隊として自己を純化している。「第二民同」たちのくり返すであろう「悲劇」は笑えない喜劇となるであろう。そこには、労働者階級解放と共産主義社会の未来は存在しようもない。あるのはただ、「血の敗北」のみである。

われわれは、プロレタリア階級の利益にかけて、革命の安寧をこそ自らの至上原則とする。だからこそ、左翼

目次

巻頭アツピール ----- 1頁

— 戦士たちへ —

○第一部

〈第一報告〉 行動委員会運動総括 ----- 5

— 我々の実践は、権力闘争の展望を

以下の如く明らかにした —

〈第二報告〉 組織総括 ----- 29

権力闘争を担いきる組織を我がものとせよ！

— 第二次組織革命への進撃 —

〈第三報告〉 情 勢 ----- 39

世界革命戦争へ！

われわれは「五月のフランス」を突破しなければならぬ！

〈第四報告〉 任務・方針 ----- 52

全ての闘争を工場占拠闘争へ！

破産せる「戦後型」階級闘争と、それにしがみつく部分（社共・革マル・8-9派）を左から解体し、武装行動委運動を軸に革命的権力闘争を大たんびに展開せよ！

○第二部

組合主義労働運動の解体から

工場・職場行動委員会運動へ ----- 77

秩序派として馬脚を表わしてきた新左翼、その主流中核派に対して、断固たる粉碎・解体の内部階級闘争をいどんで来た。われわれは、自らの共産主義的営為の一切を賭けて、革命的権力闘争を担い切っていく事を誓うし、そのために、その一切の障害物を、無慈悲に冷徹にせん滅していくことを明らかにしておきたい。

我々は、一般的に「八派政治反対」「セクト的引きまわし反対」を言おうとは思わない。新左翼の階級の本質そのものを見ずえているならば、そう言う事自体が、ブルジョアジーに対して「〇〇反対」と口にする事と、大して違いがないことを知るからである。

階級闘争の現状が必要としているのは、そのような「見解の表明」一般でなく、世界革命戦争勝利へ向けて工場占拠——二重権力——武装蜂起を敢然と実現することなのであり、その為に必要な一切を己れの肩に担うことなのである。

すべての戦士たち。

かくして、我々の新左翼との闘いは続けられている。我々は、不遜のせしりを受けようとも、プロレタリア革命の利益にかけてそれを貫徹し抜き、世界革命戦争の前衛として日本プロレタリアートを表出せしめるであろうことを宣言する。

簡所や書きもらした事も多い。我々は饒舌は欲しないがそれにしても、文章を書く為に与えられた時間は余りに少なすぎた。我々が克ちとってきた教訓を、少しでも多く、日夜あらゆる戦線で闘っているプロレタリア同胞に伝えられれば幸いである。

本号は、第一部と第二部よりなっている。

第一部は、青共同関東総会（十二月）の議案書を収録したものである。敵権力との関係で、若干の修正等をした程度で、あとは我々自身の飛躍の足跡として、不充分さを承知で発表した。そういうものとして、乗り超えて進んでいきたい。

その(1)運動総括は、敵との関係で考慮されねばならなかった。言及されていない闘いや問題点があると思うが実践によって養われた洞察力で読みとって頂きたい。だが、基本的に、国家論の指定からする、その権力の性格そこからくる盲点と弱点など、戦術レベルまでの「ブルジョア権力」論の具体化を追求しているであろう。更にそれを豊富化していくことこそ、すべての戦士の共同作業となるべきである。

その(2)組織総括にあっては、過去から現在にまで到る我々自身の限界性が鋭く指摘されている。細部にまでは辿っていないが、基本点については把え得たであろう。

我々は旅立った。この革命戦争の旅は、「平和と民主主義」の宿はもたない。すでに流されているプロレタリアと息子たちの鮮血は、必ずや償われなければならない。革命戦争の論理こそ、我々の一切を処するものである。これのみが、旅路の詩である。

暗やみにうごめく既成左翼・新左翼どもを黄泉の国へ一刻も早く送らしめよ！

彼らは一体、プロレタリアをどこへ連れていかんとしているのか？ 彼らは、いせいのいい空文句と、貧困なイメージで答えてくれるだろう。だが、その虚ろさは、彼ら自身が知っている。その故の、悪無限のブルジョア政治技術であるのだ。

彼らの側にプロレタリアートの未来はない。故にこそ我々の冷徹な作業は続けられる。すべての兄弟たち。革命的権力闘争に勝利する偉大な戦線に身を投ぜよ！我々と共に闘い抜こうではないか！

すでに開始され、永続的に続けられていく闘いの糧として、ここに武装版を送る。

すべての論文が、国家権力と内部の秩序派との二正面作戦を闘い抜く中の産物であることは勿論である。

一読して判ると思うが、文は荒けずりであるし、重複

これを如何にとらえかえし、豊富化し、自然成長的組織建設をのりこえ、プロレタリア世界革命の前衛へと自らを飛躍させていくのか。これこそ、全ての同志が共有しなければならぬ事業である。

その(3)情勢報告は、生々しい世界階級闘争の現状を把みとり、我々自身の進撃すべき道程の骨格を示している。これを、更に具体的な戦略配置として世界革命戦争勝利への展望を導き出すことこそ、これに続くものでなければならぬ。

その(4)任務方針は、これ以前の文をも含んでおり、「任務・方針」書として、不十分な面もある。しかも、戦術をパターンとして展開しようとしたため、抽象化されている面があるのであり、その限定と限界性を踏まえつつ、場所的、時間的に創造性を媒介にしつつ豊富化されんことをぞむ。

第二部は、今後、シリーズとして展開していく予定であり、その第一回である。職場反乱を組織し、工場占拠（ゼネスト）へ進撃するために、その核心としてある「左翼」組合主義との闘いについて論じている。

以上が、およそ今号に関するコメントである。充分に読み込んだ上での、同志的批判を期待している。

なお、敵の捕りよとなっている戦士達のために、弾圧対策委へカンパを集中して欲しい。

千代田区飯田橋三―一六飯田町ビル内

前衛社 気付

青共同弾圧対策委員会

(文責・水木剛介)

第一部

〈第一報告〉 行動委員会運動総括

我々の実践は、権力闘争の展望を以下の如く明らかにした

(文責 樋村 乃介)

Aプロレタリア叛乱の条件の成熟

1、帝国主義国家権力の国内攻撃の激化

昨秋十一月の蒲田における新左翼諸派のキャンペーン的玉砕は、彼らの反帝・反戦・反安保・反政府の政策阻止街頭実力闘争の総破産を確認するものであった。

十、十一月決戦を勝利的に乗り切った政府支配階級は、ロッキン・アウト、アウシュヴィッツ攻撃を主武器として徹底した処分攻撃と本格的な職場支配秩序の維持・強化の攻撃に着手した。彼らは、十、十一月闘争における街頭突撃部隊の捕捉せん滅・学園占拠の暴力的排除をもって自然発生的叛乱闘争を封じ込め、粉碎しえたと判断したのである。

この判断に基き、彼らは追撃戦に転じた。反戦派の職場からのパージ、組合主義と自らを区別して職場反乱を

貫徹しようとする部隊への集中的弾圧は、まさにこうして追撃戦に転じたブルジョアジーの階級支配の原点たる職場―生産点の支配秩序維持・強化策動の突破口なのであり、戦後世界体制の崩壊がブルジョアジーの国内攻撃のより一層の全面化・深化を不可避にしている中でこの攻撃に屈服するのか、それとも権力闘争の新たな開始の第一歩にするのかは、全労働者階級にとっての死活問題として提起されていたのである。

2、新・旧両左翼政治指導部の危機

戦後世界体制の終末は又、総評・民同の組合主義的取引き闘争の破産と権力に対する屈服を結集した。戦後型階級闘争の無力化は、彼らをして自己保身の為の更なる右傾化と反革命的組合統制の強化に狂奔せしめている。こうした権力・組合官僚の一体となった秩序維持攻撃

に対する新左翼諸派の対応は、どうだったのだろうか。

彼らは、街頭にあっては反政府実力闘争、職場においては組合内左翼反対派戦術という戦後型階級闘争の急進版に既成指導部の運動の左からの突きあげ部隊としての役割を演じてきた。

しかしながら、街頭闘争での逮捕↓組合と企業による二重処分という攻撃の前にこうした対応そのものが破産し、左翼反対派としての地位それ自身の革命的転換が要求されるに至った。

ところが、ところがである。彼らは、「労働運動の右傾化阻止」なるアナクロニズム的空文句を掲げ、現実には街頭での純然たるスケジューラ型カンパニア闘争と職場での沈黙共順路線に逃亡し、屈服の中で自己保身という民間に負けず、劣らずの反動的後退を重ねているのだ。「はねあがり分子は潰す」と称して「秩序の尖兵」としての役割を自ら積極的に買って出た中核派に至っては、何をかいわんやである。

破産と崩壊を不可避とする民間労働運動に戦後型階級闘争を革命的に解体し、ソビエト運動を展開するのではなく、「左」から支えようとし、破滅に連座しようとする諸君!! 諸君もまた、我々にとっては解体と粉碎の対象に他ならないのだ!

3、新たな叛乱の胎動

戦後型階級闘争の総破綻と自然成長的な叛乱闘争の挫折による「新・旧両左翼の政治指導部の危機」が進行する間に、労働者階級本隊の深部では端的にはあるが、新鮮な息吹きを感じさせる注目すべき胎動が開始されている。

危機の深化にせきたてられたブルジョアジーの間断なき抑圧攻撃に財政収奪・合理化・労働強化・職場支配強化に対してグループ単位の職場離脱・サボタージュや自然発生的反抗が公労協・民間重工業・中小企業を問わず随所で発生しているのである。

こうした傾向の内部に潜む革命的意義は、それが自然発生的であり、相対的には少数であれ、集団行動の形態をとっていることと、組合官僚に対する不信というよりはむしろ、侮蔑に近い感情に裏打ちされて従来の組合型闘争とは一線を画した形で行われているところにある。こうした傾向は全通戦線においてもっとも顕著に現われている。

機械化による労働力の物化・商品化を促進しえない職域を基幹とする通信労働にあっては職制支配は、他に較べてより直接的かつむき出しの監視労働の強化として表

ら耐久消費材生産部門の弱電・自動車関係において著しく。

相対的に少数な本工に基礎を置く同盟系の帝国主義的労働組合の暴力支配（日産に典型的）と職制支配に対する不満は、「ケンカして飛出す」という形での「民間重工業における定着率の圧倒的低さ」としてこれまで表現されてきたが、不況の進行は、転職しても展望が持てないため、労働者が自分の職場で居直らざるを得ないという条件をつくりだした。

4、革命の指導部における条件の成熟

戦後型階級闘争の完全なる手詰りは、民間右派のみならず、一切の既成指導部をして従来の統制力を喪失せしめ、先進的労働者の組合からの決別と自然発生的な、即ち屈折した形態ではあるが、多様な、しかも組合とは相対的に独自の反抗、反乱が随所で統発するだろう。先に見た「職制に対する不服従、反抗、集団サボ」等は、まさにその「はしり」であった。

レーニンが列挙した「革命の条件」は、「ブルジョアジーがこれまで通りではやっていけないことを感じはじめ」であり、それを直接的に行動で表現しはじめてい

現され、職制の階級の位置の犯罪性、労働者大衆と本質的な敵対関係にあることをいともストレートに労働者が直観でき、反撃の対象をより明確に把握しうる関係にあるからである。同時にまた、全通に果食う民間右派に宝樹一派の存在は、組合官僚に対する幻想を労働者が払拭するための反面教師の役割りを果たしている。

事実、年末闘争における全通官僚の三六協定（超勤受諾）締結による物ダメ闘争收拾路線に対して十二月二十一日現在で全都の全通七十四支部中の実に四十四支部、全国では百二十数支部が一斉に反発し、闘争続行の決意を示したのであり、一昨年末、職制支配との対決から大規模な山ネゴストの高揚をみた全通高輪局などでは連日職制に対するしあげが行われ、闘争收拾の為に派遣された地本官僚を「三六協定なんて関係ない」と追求して職場から追い払い闘いが克ち取られた。

問題は全通戦線内部の特殊事情に止まりえない。

民間基幹産業でも高性能機械の導入による合理化が不況圧力に強制された「設備投資の一段落」をもって転換を余儀なくされ、人べらしと臨時工、季節工雇用による直接的な労働強化に職制の直接的支配・抑圧の強化が進行している。

こうした傾向は、輸出の先行不安と国内需要の一巡か

今、そして「いままで通り」を相も変らずやるうとして
いる新・旧左翼指導部の破産と屈辱が如実となつた今、
まさに「満たされはじめた」いるのであり、大衆的な
ロレタリア叛乱の権力闘争の端緒形態の条件は、確実
に、しかも加速度的にその成熟の度合を深めているので
ある。

我々は、東海大、法政大を始めとするこの間の闘争の
主体的・実践的総括を経て、戦後型階級闘争、更にはそ
の急進版たる新左翼運動の必然的な帰結といふべきその
破綻を乗り越え、職場・学園支配秩序、ロック・アウト
→アウシュヴィッツ体制を突破して権力闘争を推進する
戦略的展望を唯一、自らのものとするに至っていること
をここに宣言する。

これが「第四」のそして最も肝心な「革命の条件」で
ある。我々が同盟結成以来獲得した成果の一切を更に深
化させ、自らを革命闘争の前衛として確立しなければなら
ない。

古い闘争の破綻が社会的に確認されている今こそ、新
しい闘争がとってかわって登場すべき絶好の機会なので
ある。

B 立正大・全通大崎闘争の提起した諸問題

占拠闘争に直線的に集約するという方針は、現実化しえ
ないことが確認され、権力を撃破するための地区人民戦
争が検討されるに至った。

そのプランは、①機動隊の先発部隊の引出し→撃破→
その衝撃と交通網の分断による大衆結集→人民戦争とい
う方針と②大崎闘争の焦点化→全都的、全国的労学支援
共闘の組織化→大規模な統一戦線の力量を一点に集中し、
人民戦争を実現するという路線の二つに大別できた。

しかしながら、前者については不特定多数の市民をあ
てにできないこと、後者に関しては叛乱戦線の無力化と
新左翼指導部の反動的後退からして意識的叛乱部隊の結
集はやはり、一般的には期待しえず、「何らかの媒介」
が必要であるという難点を解決しえずに結局のところ実
践方針化されなかった。

我々はまさしく、この時点で権力の壁を突破する方向
を打出しえずに占拠方針と人民戦争方針とがその原則的
正当性にもかかわらず、最大限綱領主義的スローガンと
空文句に止まっていたことを暴露してしまった。

3、職場叛乱のほり起しに関する問題点

前項の問題と同時に、大崎闘争では職場叛乱の他局へ

1、流動制圧戦を直線的には個別占拠闘争に集約 しえないこと

七〇年代権力闘争の先駆ともいふべき七〇年春季の立
正・大崎闘争は、戦路上解決すべき次のような課題を懸
案として我々に残した。

立正大闘争では、当初設定した流動制圧→部分占拠→
全学占拠という戦略的シエマに問題があり、流動制圧
戦から個別占拠闘争を直線的には展望できないことが明
らかにされた。

何故なら、強化された帝国主義国家権力は、全学占拠
はおろか、それ以前の部分占拠の段階で占拠闘争を個別
撃破してしまからである。

即ち、部分的であれ全学的であれ、占拠闘争の貫徹は
ブルジョア権力の暴力装置の一定の麻痺を前提にするこ
うことであり、その解決策としての地区人民戦争が再
度我々の問題意識にのぼつたのである。

2、地区人民戦争と革命的統一戦線の形成

大崎闘争でも流動制圧→処分→権力出動による被処分
者の排除という壁に突当ってやはり、流動制圧戦を個別

の波及と処分による先進的叛乱者の職場からの排除以降
の叛乱の再組織化即ち、職場叛乱の二正面におけるほり
起しが問われていた。

しかしながら、我々は占拠闘争での経験を理論化し普
遍化しえずに一人の革命家の「自己犠牲の献身性」に決
意に一面的に依存するという根性論的総括を止揚できず
にいたのである。

革命的権力闘争の出発点たる職場叛乱は、闘争の持続
と拡大、波及を保証する指導内容の欠如から一度限りの
実践に止まっていた。

職場叛乱・占拠闘争・地区人民戦争方針の抽象論的空
文句の帰結こそ、菱和・大崎に続く職場叛乱の労働者行
動委運動の組織化の実践上の放棄、学習会結集という名
の「実体の喪失」であった。学生戦線におけるダイナミ
ックな行動委運動の展開とは対象的に、ソビエト革命の
本隊たるべき労働者戦線にあっては三多摩を除いて行動
委運動の空白期が続いたのである。

4、占拠闘争論の抽象論への傾斜

問題の核心は、我々がこれまで語ってきた工場占拠闘
争の内実と戦略的意義に関する理解が恐しく曖昧であり、

一部では既に提出されていた視点すら全体の普遍的確認に至っていないところにある。

それは、いろいろなところの「占拠闘争」が「個別占拠闘争」を意味するのか、或は、「全国的な占拠ゼネスト」を意味するかが分明ではなく、従って、個別占拠闘争と占拠ゼネストとの戦略上の関連及び両者の間に横たわる本質的差異が不明確にされてきたということである。

「資本、国家権力の非妥協的なロッキアアウト攻撃を一企業労働者だけの武装バリケード闘争によってはねかえすことはできない。それは、その地域、その地方、ときとしては全国の労働者の共同の闘争としなければならぬ」(前掲五二号論文)とする視点だけでは決定的に不十分なのである。「他の企業・学園の先進的な労働者・学生に訴え問題をつきつけ」、彼らをして個別占拠闘争の貫徹を「共同の闘争」として担わせることが「闘争の一企業の限界をとりはらうこと」(同)を意味するのだろうか。

ここからは立正、大崎闘争が残した三点の課題、就中どうした「媒介」をもってすれば地区人民戦争を担うに足る統一戦線の形態が可能となるのかという問に対する回答を得ることはできない。単なる「訴え」や「つきつけ」である一企業の占拠バリケード・ストライキに意識

闘争の統一戦線を乗り越えた独自かつ革命的な統一戦線を組織しうるのである。

C ロッキアアウト・アウシユヴィツ体制 粉碎の基本戦略

1、国家権力の秩序維持攻撃の性格

帝国主義国家権力は、街頭実力闘争の粉碎・学園占拠闘争の個別撃破を強行する過程でブルジョアジー自身の総括に基いて、職場・学園闘争を圧殺する戦術の基本的パターンをつくりあげた。それは、職場・学園闘争の大衆的叛乱・占拠闘争への発展を阻止することを主眼として組み立てられ、①指名告訴と機動隊の有事出動体制によって叛乱を芽の内に摘み取る事、②一度叛乱が大衆化した場合にはロッキアアウト体制を布いて大衆を職場・学園から排除すること、③一定の冷却期間を置いた後に検問・アウシユヴィツ体制の下で、操業や授業を再開し、ガードマン、更には機動隊の常駐による権力の直接の監視によって闘争の再組織の動きを封殺して正常化という名の職場・学園支配秩序の回復・強化を図ることをその主内容としている。

的叛乱大衆を結集する可能性は皆無に等しいことを我々の総括は明らかにしたのではなかったか。

こうした理解はまた、占拠闘争の一企業の限界の突破の意味を「個別占拠闘争では守りきれない」というところから求める大衆運動主義的・自然成長論的立場を越えるものではなく、更に、職場叛乱の外への拡大・波及の問題の——自らの叛乱を中途で手控えてその間のつなぎとして他に働きかける——という「逃げ」の姿勢での解釈をもたらしかねない。

その上、ロッキアアウト粉碎闘争方針を他の職場・学園との統一戦線の存在を前提にしてしか設定できないため、権力闘争の当面する任務に関する実践方針上の回答の回避をも意味するのである。

地区人民戦争による決着がロッキアアウト粉碎闘争の全てではない。それを可能ならしめる大規模な労学統一戦線の形成以前の段階に適要しうる有効な反撃の戦術を我々は、東海大、法政大闘争を経て獲得したのであり、この獲得された戦術の連続的展開とそれを一個の戦術パターンとして確立する作業を通してその現実的有効性を社会的に承認させること、更には、その戦術に基づいて我々自らがあらゆる職場・学園のロッキアアウト粉碎闘争を主体的に組織することによりはじめて、カンパニア

2、新左翼の屈服と急進的組合主義の破産

笑 え ない 喜 劇

未だに学生運動の主流を成し、職場にあっては民同の補完物の地位に甘んじている新左翼は、ロッキアアウトアウシユヴィツ体制を突破する方針を提示しえず、対決を回避するか、さもなければカンパニア的に打止め式的闘争を行って若干の闘り姿勢を見せた後の困込み↓入管闘争等の街頭カンパニアへのすりかえという闘争収拾策動→屈服路線を取り続けている。

とりわけ、何度目かの茶番たる六月決戦の勝利を経た後の彼らは、権力の追撃に恐怖して無制限の敗走を重ね、六七年以前の自治会主義的・組合主義的合法闘争に回帰し、権力にひたすら恭順の意を表すことによって何とか党派の命脈を保とうと懸命にさがっている。

大阪中野では一組から組合員の過半数が脱退し、二組の「全郵政」に走ったため、一組防衛の立場をとった官僚は、この年末闘争の戦線からの脱落をどこよりも早くに決定してしまった。

新左翼秩序派の中核派は、こうした闘争収拾路線に自ら連帯し、「労働運動右傾化阻止」という名の民同との抱き合い心中路線の破産を身をもって立証してみせた。

ゼネ石でも同様な経過をたどって急進組合主義は、敗北した。

労働者大衆自身による職制のつるしあげ、追放による中間・下部職制の全面的な麻痺、労働者大衆による職場制圧闘争を「組合型ストライキ」に集約しようとした瞬間、急進組合主義者は敗北を決定的にしたのである。

「労働組合は、労働力商品の販売者としての労働者のブルジョアの利害をその組織基盤にせざるをえず、したがって、労働組合闘争は私的個人の一人一票による多数決とそれにもとづく執行委員会というブルジョアの組織原理と労働者の種々な層や部類のブルジョア的特殊利害をころした多数決原理を通じて最大公約数的に調整するというブルジョアのな行動原理とによって、根底から制約されざるをえない。

だからこそ、組合的な「統一と団結」——組合的な組織維持と組織防衛——は、日和見的部分への戦闘的部分の妥協と譲歩——いわゆる中広主義——を根本原則とせざるをえない」(前掲五二号巻頭論文)

事態の推移は、まさにこの指摘を完全に裏付けるものであった。

組合主義者と自らを区別して闘争の出発点から目的意識的に組合官僚との党派闘争を貫徹しつつ、叛乱する労働者

者を行動委員会に組織する努力を怠り、官僚を突きあげて、一票投票による「権力闘争の展望と視点を欠いた組合型無期限スト」に持ち込んだ結果は、闘争の長期化に動揺し、ロック・アウト攻撃に展望を失った二組労働者の「逃げ腰の分解」を生み、二組への大量加入をもたらした。

ドブプリと首まで組合主義的意識に浸っている急進組合主義者もまた、大衆の右翼的分解に引廻され、一組防衛を至上命令と心得て不様で総括のしようがない全面敗北の道を選んだのだ。自ら主体的に階級闘争の展望を切開く内容も方針も持ちえないが故に、「より少い悪を選ぶ」という相対主義の立場をとらざるをえない左翼反対派につきものの悲しき限界がここにある。

個別的。組合主義的ストライキでは活路を見出しえない溢路をどのように突破して権力闘争への道を切開くのか、これは「笑えない喜劇」——左翼反対派戦術の破産を真に総括しうる我々だけが担うことのできる歴史的任務なのである。

3、資本金家国家権力の本質的弱点

ブルジョアの階級支配に個有な弱点

を看取ることができる。

従ってブルジョア国家権力は、①計画された戦術による流動的制圧戦、支配秩序のかく乱。部分的麻痺闘争や②同時多発的、全社会的叛乱には有効に対処しえないこと、③階級関係の緊張が社会的に集中された一点での突破し総動員された暴力装置の無力化は、権力支配の全社会的麻痺を生ぜしめ、叛乱の全社会的波及と拡大の条件の一つをつくりだすことが明らかとなる。都市(地区)

人民戦争の戦略的意義はここにある。
六八年フランスにおけるカルチエ・ラタン闘争が学園占拠闘争という部分叛乱をゼネストという全体叛乱に転化せしめた事実、六八年九・一二日大闘争が学園占拠闘争を全国化せしめる契機となった事実を想起すべきである。

ブルジョア国家権力を史上最強の究極の暴力たらしめるその同じ中央集権的体制が、同時にまた、その個有の弱点を形成している。国家権力の攻撃の本質的限界を熟知している我々のみがその寸断し麻痺と恒常的叛乱し権力闘争の組織化を展望しうるのである。

4、ロック・アウト、アウシュヴィッツ体制粉砕の基本的戦術

資本主義的階級支配の歴史的特徴は、①商品経済を基礎にして、②経済的搾取過程からその暴力的維持機構が分離し、軍隊・警察・官僚によって担われる中央集権的な国家権力として個別生産過程の外部に組織されるという点にある。

①からは労働力の商品化を通して搾取が自動的に貫徹されるといふ一般的結論が導き出されるのであるが、事実としては機械制大工業成立に至る労働力商品化の歴史的過程自身、それに対する労働者の即自的抵抗を抑圧する不断の経済的強制的過程であったし、そしてまた機械制大工業下においても労働力の完全なる商品化、物化が実現されなければ、職制支配等の人的強制による直接的支配がその最終的保証となっている。

従って生産過程内部では労働者の直載な或は、屈折した抵抗に対する職場支配秩序の強制を通して不断の麻痺とあつれきが普遍的傾向として続いている。

そして戦後体制の崩壊は、こうした矛盾を顕在化させ労働者階級の抵抗はより具体的・直接的な行動として表現されはじめている事実、何れも確認した通りである。ここに我々が職場叛乱を組織しうる第一の根拠がある。

続いて②からは、国家の暴力装置を各生産点に恒常的に配備しえないというブルジョア国家権力の個有な弱点

精銳を誇った日大全共闘ですら活路を見出しえなかつた権力の攻撃にも弱点があり、突破する方針は存在する。

①部隊の成員の氏名を特定されないための擬装と証拠の陰滅、逮捕された場合における完黙の貫徹は、告訴攻撃を殆んど無力にするのであり、「計画・準備・実行・撤退」を含めた「ワンセット方式」として表現される「計画され、組織された戦術」に基く迅速果敢な行動は、権力支配の間隙をつくことを可能にし、新たな間隙をつくりだしたり、それを拡大したりすることを可能にする。

②ロック・アウトという攻撃は、(a)ブルジョアジー自らの手による学園・職場の機能麻痺であり、彼らはそれを長期に亘っては維持しえず、「短期決戦」による秩序の早期回復を目指さざるをえない。(b)中央集権的ブルジョア国家権力の個有の弱点として機動隊の常駐体制を敷くことができず、ガードマン等(粉碎は比較的容易)で補完せざるをえないため「防衛」の体制を基本とする以外にはなく、攻撃のヘゲモニーは我々の手にある。

軍事の基本を知らない新左翼諸派は、「短期決戦」を望んで万全の布陣をしいて待構えている権力の思惑にまんまとはまりこみ、ロック・アウト闘争の終幕としての玉砕カンパニアショウを演ずるか、口ゲバ等による申し訳程度の「ロック・アウト粉碎闘争」を試ることしかで

きなかった。

けれども、「防衛」の体制でありながら「短期決戦」を拒まざるをえない権力の弱点を知っている我々は、計画された戦術をもって自らのヘゲモニーによる攻撃を連続的に展開することによって、ロック・アウトという名の敵権力自らの支配機能麻痺を長期化・永続化させうるのである。

こうした攻撃の連続的展開によって「一度ロック・アウト体制を布いたらブルジョアジーのヘゲモニーによってはそれを解除し、『正常化』することができない」という状況をつくり出し、新左翼型闘争の限界故に隠蔽されてきたブルジョアジーの攻撃の弱点を暴露し、彼らをして展望を失わしめることが可能となる。

③ブルジョアジーの闘争封殺攻勢は、労働者・学生に対する直接的支配一むき出しの抑圧の形態を取らざるをえず、大衆内部に広範な不満を醸成し、支配者と自らが本質的敵対関係にある事実をより一層鮮明にする。アウン・ウエイツ、検問体制は、その極限である。同時にそれは、ブルジョアジーにとって叛乱闘争の個別的圧殺Ⅱ秩序回復攻撃の最後の切り札を意味する。秩序を回復するためには労働者・学生大衆を抑圧せねばならず、その抑圧はまた新たな反抗を呼び起さざるをえないというブル

ジョア支配の矛盾の集中的表現がアウン・ウエイツ・検問体制なのである。計画された戦術によるアウン・ウエイツ・検問体制の粉碎闘争が大衆的群衆戦と結合して工場・学園人民戦争として爆発する根拠がここにある。

東海大闘争の発展過程が示しているようにアウン・ウエイツ。検問体制が強化されればされる程、大衆の不満はウツ積し、叛乱のエネルギが蓄積されるのである。

アウン・ウエイツ粉碎闘争が一度限りで終るならば、大衆の不満と怒りは絶望的諦観に変質し、「正常化」を受入れてしまうかも知れない。けれども、権力の弱点をついた連日の遊撃戦の展開や、或いはまた、最初の闘争の余韻が消えかかり、その結果として権力の警戒体制が緩み、隙が生じた時期を見はからった上での再度の登場は、敵権力の寸断、大衆叛乱の更に大規模な爆発を可能とするだろう。

計画された戦術の連続的展開を通して敵権力のかく乱と麻痺を引起し、大衆を流動化させて遊撃戦と群衆戦の結合を克取ること、これがロック・アウト、アウン・ウエイツ粉碎闘争の基本である。こうした闘争を東海大や法政大で更に推し進め、それを一個の戦術パターンとして定式化してその戦略的展望を社会的に承認させつつ、その質を全国的に波及させなければならぬ。新左翼型

の単純対応主義的ロック・アウト抗議闘争がまさにその打止め式的性格の故に破綻し、労働者・学生大衆が屈服を強制されている全ての学園・職場に共産主義武装行動委員会は、「勝利する戦術」を携えて登場し、ロック・アウン・ウエイツ体制を必ずや粉碎してみせるであろう。

D 戦略的大目標としての占拠ゼネストにむ

けた巨大な陣型を構築せよ！

1. 戦略的大目標としての全国占拠ゼネスト

生産管理。武装を基礎とするソビエト形成を展望する場合、実は工場占拠闘争一般ではなく、工場占拠ゼネストが戦略的環ソビエト運動の一大分岐点をなす。

「ゼネストは、いかなる改良的スローガンを掲げようと生産過程におけるブルジョア支配の全国的喪失のみならず、政治過程の支配をも喪失させるが故に極めて政治的な行為である。何故なら、資本家的生産の労働者階級による全国的停止は」、「ブルジョア国家権力の弱点をあげき出し、全労働者階級の決起の前にはそれが無力であることを暴露するからである。

ゼネストの意義は、一つにはブルジョア支配の麻痺で

あり、更には、ゼネストという生産過程におけるブルジョア支配の即時的否定は、ブルジョアが精神的・イデオロギー的支配の物質的基礎である生産手段を支配しえないという事実の下に、更に高次な否定↓生産管理・ソビエトへのプロレタリアートの階級形成を可能にする客観的根拠を創出するというところにある」(武装四号反乱闘争と我々の任務)

「我々は、こうした資本主義体制に対する全面的であれ、部分的であれ、アンチ・テーゼとしての労働者階級の闘争を『反乱』の第一の規定として確認できるだろう。

それは、体制に対する『アンチ・テーゼ』であるが故に自らを社会主義革命の主体として自覚していない労働者階級の闘争であるけれども、労働者階級は、そうした体制に対する『否定』の媒介なしには自己を社会主義革命の主体として『止揚』できないという意味で『反乱』は、革命戦略上不可欠な環を占めるのである」(前掲同論文)

「我々のいう『反乱』とは、階級闘争を体制的改良闘争に集約する機構が破綻し、権力闘争が真正面から問われている時点にあって、個々の職場・地区におけるブルジョア支配の部分的かく乱から出発して全国的な麻痺を引起し、プロレタリア権力の形成を追求する闘争であり

我々は、流動制圧戦が権力闘争の端緒的形態であり、ブルジョア支配からの部分的解放闘争をプロレタリア大衆が自ら担うことは、プロレタリアートをして自己が社会的主体であることを自覚せしめてゆく過程の第一歩であることを知った。計画された戦術を駆使し、職場支配秩序粉碎と新左翼をも含めた一切の組合主義者を解体する闘いを献身的に担う部隊として自らを組織する共武行の現在の任務は、こうした闘いに立上ったプロレタリア大衆を多様な形態の大衆行動委に組織し、両者の結合による遊撃戦と群衆戦との結合をもってロツク・アウト、アウンシュヴィッツ体制粉碎の闘争を連続的に展開し、波及させ、戦略大目標たる占拠ゼネストの主体的・社会的条件をつくりだすことにある。

権力闘争の発展段階に応じて各種の形態をとる流動的制圧戦Ⅱ全面的制圧を可能にする権力関係にいたるまでの権力闘争であるが故に質的に差異はあっても、相対的には部分反乱に止まっている段階の権力闘争Ⅱは、権力支配の間隙を発見して攻撃し、さらにその間隙を拡大し、麻痺に追込む闘いとして組織されねばならぬ。

(1)職場叛乱の掘り起し

現在広範に自然発生的な登場をみせている職制支配に対する不服従・屈折した反抗、サボ等を発見し、意識化

まさに、その意味で権力闘争・ソビエト運動の内的前段をなすという革命的意義を有する」(同)

ここではブルジョア権力麻痺とプロレタリア権力形成の関係が、生産過程の支配の問題を媒介として権力闘争の弁証法的発展の過程として説き明かされている。

戦略の大目標としての全国占拠ゼネストの意義を確認するならば、流動制圧戦としての職場・学園叛乱闘争を個別占拠闘争に直線的に集約するのではなく、当初から横への拡大・波及が目的意識的に追求されねばならないことが明らかとなり、従って流動制圧戦↓外への拡大・波及に「防衛的視点から叛乱を手控え、つなぎとして他に働きかける」という消極的な位置づけではなく、「まさに戦略的大目標たる占拠ゼネストの実現を目指す」という積極的・攻撃的な意味を与えることができるだろう。

流動制圧的職場叛乱の他の学園・職場・地区への波及を通して個別占拠闘争の枠を突破し、それを全国的に波及させる媒介としての工場・地区人民戦争を担いいうる革命的な統一戦線の形成が可能となるのである。

2、学園・職場叛乱→流動的制圧戦の展開によつて占拠ゼネストの条件を創出せよ!!

(自らの行動の階級的意義を理解させる)、恒常化させ組織する。

誰でもやっていること、誰にでもできることから開始させ、行動委相互の経験交流や指導を通して計画された戦術の採用を提起し、更に高度かつ広汎な叛乱を自ら闘わしめるように組織せねばならぬ。

(2)行動委の組織的強化をどのように克服するか。

持続性を持たず、個別の枠内、組合主義の枠内に止まりがちな自然発生的、即時的叛乱の限界をプロレタリア大衆自らに止揚させ、行動を永続性化させつつ、個別を越えて外への拡大志向を持ち、組合主義者と自己を区別した行動委に組織するにはどうしたらいいだろうか。

口で言った位で簡単に理解されるものでもないし、学習会オルグでも限界があることを我々の経験は示している。

②叛乱を実質化させること

闘争勝利の戦術的展望を明らかにする方針で結集し、実践させることで「展望なき組合主義者、急進組合主義」と自らの行動上の区別を行わせなければならない。

その過程で当然組合主義者と方針をめぐめる対立が起るだろう。その対立を目的意識的に党派闘争に転化させること。この作業を欠いては組合主義者と自らを区別する

意識は定着しない。

⑩連続性と拡大志向をもった方針を提起すること

これは恣意的な引廻しや、大衆の技術的操作ではない。何故なら、先にも確認したように権力闘争の戦略において闘争勝利の展望を明らかにする戦術それ自身が行動の連続性と外への拡大を必然的に要求するからである。まさに、こうしたプロレタリア大衆の行動自体の持続性と外への流出が媒介となって行動委運動としての定着が可能となるのであり、我々は、それを一定の行動様式と思考様式にまで高め、意識化させなければならない。学習会等による理論の外部的注入は、プロレタリアーが実践を通して獲得した質を自ら総括させ、目的意識性として定着させる手段としてのみ意義を持ちうるだろう。

ブルジョア権力の弱点を知っている余裕、戦略に裏打ちされた計画された戦術の採用による余裕ある闘争の連続的展開は、ブルジョアジーや組合主義者、左翼反対派の動向に振廻され、闘争進展の中で自分を失う大衆運動主義的発想からプロレタリアートを解放し、強固な行動委に彼らを組織することを可能にするだろう。これに加えてこうした闘争の積重ねから獲得された自らの実践力に対する自信の与える余裕、いつでも非合法闘争に転換

しうる余裕ある組織体制、この四つの余裕こそ、権力闘争を自らのヘゲモニーのもとに闘い抜く我々の基本的支柱である。

Ⅱ 共武行の確立と大衆行動の組織化をもつて

権力闘争のダイナミズムを保證せよ！

1、労働者・学生大衆を多様な「大衆行動委員会」に組織せよ

多種・多様な個別的な要求課題を基軸に結集する大衆の闘争組織は、その故をもって始めから一定不変の質を相互に共有しているわけではなく、たえず変化し、成長発展するものとしてあり、従って現実には多種多様な発展段階にある諸組織が並存することになる。そして、これらのたがいに質を異にする諸闘争組織は、その自発性に基づく闘争力とエネルギーと原始的であるが故に強力な大衆オルグ能力とを有しているのであり、そうした組織相互の独立性、自立性を保持しつつ、相互に競い合ふ、交流し、牽引し合うことこそ、全体としてのダイナミズムとその中の諸闘争組織の相互促進的成長、発展を保證するものである。

なり。

個別闘争の枠を越えた普遍的質を有する部分が共武行として独自かつ単一の共産主義的に組織されていることが、多様な諸行動委員会の連合の有機的統一性と権力闘争に向けた目的意識性との結合を実践的・組織的に保証する。課題別個別性をもって組織された大衆行動委員会と共産主義的目的意識性・普遍性をもって自らを組織した共武行との区別と連関をもつた組織化が我々の当面する組織方針である。

共産主義的質をもって自らを組織し、大衆行動委の組織化を通じて大衆を組織し、自らの闘争をもってその質を他の戦線にも波及させ組織するという組織者としての能力が「組織する暴力」としての共武行に要求されているのである。

敗北を知らない我々の戦略・戦術——権力闘争に勝利する唯一の展望——を各々の闘争に合わせて計画された戦術として実践方針化する能力とそれを担い切る組織的実践力こそ、共武行に要求されている質であり、そうした質をもって自らを組織する共武行にとっては大衆運動主義者につきものの消耗や挫折は全く無縁なものとなり世界革命を最後の最後まで（共産主義社会の実現まで）一貫して担い切る革命の前衛組織として共武行は権力闘

従って、我々は、こうした諸闘争組織を自治会主義、組合主義とは独自の諸大衆行動委員会として組織し、それらの独自性、自立性を保証した上で「行動委員会連合」として相互に結合させなければならない。多様に組織された大衆行動委の存在とそれら相互の有機的結合は、広汎な大衆叛乱の爆発をより確実に保証する媒介となるだろう。

2、共産主義武装行動委員会の任務

要求課題を基軸に組織された大衆行動委にとつてはその要求の貫徹を保證する戦術として学園・職場叛乱、流動制圧戦は理解されるだろう。ところが、プロレタリア革命を目指す共武行にとつてはその意義は、単なる改良的果実獲得の手段に止まりえず、ブルジョアジーの学園・職場支配の間隙を見出し、攻撃を加え、分断・寸断して更に間隙の拡大をはかりつつブルジョア支配の麻痺。かく乱を追求すること、同時にそうしたブルジョア支配の危機の主體的創出を通してプロレタリアートを権力として組織させる闘争を展開すること、即ち、権力闘争の具体的実践の現在の環としての流動制圧闘争の展開という戦略的視点が一切を判断する基準とならなければならない

争の先頭に立って終始闘い抜くであろう。

F 個別学園闘争の普遍的教訓

1、立正大闘争

六九年十一月決戦敗北による自然発生的叛乱の挫折——叛乱戦線の解体と無力化を確認した上で我々は、叛乱戦線再構築——権力闘争の展開の方針を「教室突入、教師に対する人民裁判等による学内流動制圧↓部分占拠↓全学再占拠を通しての全共闘の再建」として設定した。

立正大の先進的学友は、他の戦線に先駆けてこの方針の実践化の作業に取組んだ。この貴重な経験は、教室突入↓流動制圧闘争が直線的に部分占拠↓全学占拠に発展するものではないことを明らかにし、占拠闘争の革命的再生と流動制圧戦との関連、即ち、当面する実践的課題としての流動制圧戦の戦略的意義の再度の確定を要求した。

我々は、こうした教訓を踏まえて来るべき占拠闘争の再爆発は、地区人民戦争、地区占拠闘争の展開の中で可能となるだろうこと、それを支える地区労学行動委運動の組織化が急務であることを総括し、立正大の諸君は、

しかしながら、全共闘の攻勢の前に右翼が沈黙を続ける間あって立正大の学友は、決戦の不可避的到来を予感しながらも、それが具体的にはどのような形で訪れ、またそれをどのように設定するかを測りかねていたのである。

今ひとつの問題は、学館制圧が維持され、右翼が対決を回避する中で指導部の意識内部に一種の「防衛主義的発想」が芽生えてきた点にある。

立正大の学館を解放し、全国学園闘争の拠点にするという展望の積極性は評価されねばならないが、現実の階級関係、特に学内右翼との決着がつけられていない状況にあっては権力闘争の質を持った闘いの過程における学内拠点の確保はむしろ、一時的、例外的なものとして位置づける必要があるものであり、学外に出撃拠点を設定しつつ流動制圧戦を展開することが基本であり、学内拠点は、戦略的には前進基地として理解しておかなければならない。

しかるに、指導部の意識にしのび込んだ学館防衛主義は、五月二十一日に民青が地区民を総動員して全共闘に対決を挑んでくるという情報に接して「対民ゲバ↓権力介入↓右翼反撃↓全共闘の学外放逐と学館の喪失↓学内拠点防衛のための決戦回避」という対応を生み出させし

全通大崎。国労大崎支援と続く労学行動委運動の中核部隊として全体を牽引したのである。

立正大学行動委員会は、更に入学式粉砕闘争を経る過程で学内右翼の政治的指導部たる応援団を解散に追い込むなど右翼に対する先制的攻撃闘争を繰広げ、学生会館を半ば制圧するに至った。数十名の全共闘部隊の活気に溢れた闘い振りを目のあたりにした日大全共闘の学友をして「今時こんな全共闘が存在するなんて……。」と驚嘆せしめた事実が物語るように立正大全共闘は、混乱と停滞に打ちひしがれた新左翼諸派を尻目に全国学園闘争の最先端を疾駆していたのである。

六八年を経て学内右翼の分解が全国的に進行し、一時のように数百名規模で体育会系学生が反革命ゲバルトに動員されるような事態は見られなくなっており、立正大においてもそうした傾向は現れていたが、立正大内の右翼の潜在的影響力を考慮した場合、この時点で学内右翼を引出し、粉砕、解体する闘争が具体的日程にのぼったとみなければならぬ。そして、右翼が以前のような大衆的結集力を喪失し、独力で全共闘に対する決戦を排みえない以上、決着の時期はむしろ、権力の介入に便乗して右翼が政治過程に登場し、その反革命としての本性を露わにする瞬間として設定されねばならなかっただろう。

めたのであった。

当局、右翼に対して終始攻勢を展開しつつ全共闘大衆を結集してきた指導部の動揺は、その影響力の強さの故にたちまちにして全共闘内部に波及し、重苦しいムードが全体に蔓延してその攻撃的姿勢が崩れるきっかけをつくった。

ここで興味のあるエピソードを一つ紹介しよう。

青共同や行動委員会の諸君の消沈ぶりとは対象的に、社青同解放派の一活動家が「一人でも徹底抗戦する」と叫んで奇妙にハッスルしていた。

彼は、別に発狂したわけでもなく、党派的な思惑からカンパニア的に対応したわけでもなかっただろう。それは、立正大行動委によって解放派の路線の誤りを不断に指摘されて「わけがわからなくなり」、理論というよりも立正大行動委の革命的行動に触発、牽引されてつき従ってきた彼の方が「自己の行動論理」との内的葛藤と対決を経て結集してきたため、我々の部隊よりも素朴に、多少見当違いではあるが立正大全共闘の行動の帰結する方向を直観していたからにほかならない。

閑話休題

ところで、防衛主義的発想から腰砕けになり、後を振向いてしまった立正大全共闘に権力は、直ちに追撃を

かけた。五月二十一日早朝の強制捜査と指導的メンバーの逮捕である。

全共闘の防衛主義的消極化↓権力の追撃↓指導の麻痺↓全共闘の活動麻痺を救ったものは、二部の対民闘争であった。数十名の部隊によるゲバ訓、武装デモは、権力の介入に便乗して登場しようとした右翼に対する革命的どう喝となり、六月の全共闘再結集の条件をつくった。前期闘争の総決算は、六・二六、二七の高揚と敗北に集約される。

闘争の收拾を狙った当局の説明集会紛争↓権力の公然たる介入↓それに便乗した右翼職員・学生が全共闘の学友を権力に突出すといった経過がそれである。

権力の介入とそれに便乗する右翼の革命的登場との対決をその一環に組入れた「戦術の計画化」が不十分であったための初歩的・技術的失敗、或は情況の変化に敏速に対応する積極的姿勢の欠落がこの敗北を引起し、同時にまたその後の反撃を不十分にした最大の要因であった。

権力の介入↓右翼の政治過程への登場という先に確認した右翼せん滅の最大の好機が実はこの時だったのである。従って立正大全共闘は、学友を権力に売渡した右翼職員、学生に対する追求、反撃を階級的増悪を最大限に

なることが明らかとなった。

学内闘争は、対中核党派闘争によって一頓座せざるをえなかったが、春以来の連続的流動制圧闘争、全通大崎・国労大崎闘争を通じて明学大共武行は、一時的、個別的叛乱の枠を乗り越えて闘争の連続的・永続的展開力と他の戦線に対する積極的波及の志向性を自らのものとする質を獲得した。「綱領的一致があればどんな引廻しにも耐える」という行動原則に自らを律する明学大共武行の組織性と行動力は、七〇年前半を経て後期に開化する共武行運動の最大の牽引車となりえたのである。

この一見乱暴にも見える行動原則は、単なる指導部の引廻しではなく、我々の共武行運動が個別課題の枠に自らの行動を限定するのではなく、闘争の連続化と外への拡大・波及という時間的・空間的な普遍的質の獲得を組織的任務として課している事実を物語っており、同時にあらゆる機会を把握し、あらゆる場所で闘争を組織する行動の積極性は、党の綱領——戦略の中に位置づけられて初めて実体化しうること、或は、綱領——戦略それ自身がそりしたダイナミックかつ積極的行動の最大限の展開を保証する根拠を自らのうちに有する一種の行動原理にまで深化されたものとしてなければならぬ事実をも指し示している。

発揮した「革命的報復戦」として展開しつつ、学内階級闘争を先制的・攻撃的に詰めていく闘いを開始すべきであった。

敵の攻撃の本質的性格を分析し、その弱点を発見し、そこに攻撃を加えるという基本的視点を獲得している我々にとって方法はいくらかもある。右翼を恐怖のどん底に叩き落す闘争は、現在もなお要求されているのだ。

2、明学大闘争

——共武行運動の成果を行動原理として内実化せしめよ

明治学院大学では立正大闘争の総括を踏えつつ、教室突入闘争にはブルジョアジーの学園支配に対決する焦点の設定が不可欠であるとして四月から臨時雇用制度粉砕（寮母雇用問題から出発）、十時戒厳令（午後十時から翌朝七時までの夜間立入禁止措置）粉砕を掲げた流動制圧戦を展開した。

こうした闘争を通じて大衆行動委員会が目的別、課題別行動委員会としてまず組織されること、多様な要求課題に基づく大衆行動委の多様な組織化が共武行の先行した闘いと大衆叛乱との結合をより確実に保証する媒介と

原則綱領草案における「むきだしの暴力」規定、この間の闘争を通じて獲得された「ロック・アウト、アウシ ユビッツ体制」粉砕の基本戦略、それに基づいて計画された戦術の展開こそ、我々の行動委運動を現在の支える支柱なのである。

九。一闘争における中核派の精鋭部隊の粉砕を通して彼らは完全に学外に放逐された。明学大全共闘の九月における解体の確認以降、学内支配秩序に対する粉砕闘争と叛乱戦線の革命的再構築は着実に進行している。学友会祭粉砕闘争は、学内諸組織の解体↓大衆の分解と右翼の解体を促進し、学費値上げ粉砕闘争を通じて院長、学長の学外追放、教授に対する連日の人民裁判・授業・試験粉砕闘争が克ち取られ、学内は「権力」として振廻うことを公然と宣言した革命的学友によって制圧されている。

更にまた明学大行動委は、冬期休暇中に大崎駅頭ピラマキ、全通〇〇局へのバイト介入を軸にした底辺委運動を展開し、夏の底辺委運動を上廻る多大な成果を獲得したのである。

3、東海大闘争

右翼の暴力的支配に一切の新左翼諸党派が屈服し、戦線の放棄と逃亡を続ける中で「松前の平和」が謳歌されていた東海大キャンパスに銀ヘルメット部隊は、五・二七に続く一連の連続的武装登場を敢行し、松前支配体制をつき動かし、学園の様相を一変させた。学内支配秩序維持の暴力装置たる右翼は、完全に麻痺し、その有形無形の圧力の前に屈従を強いられてきた学生の革命的分解と再編が急激に進行したのである。学外に出撃拠点を設け、計画された戦術の下に学園支配秩序麻痺の闘争を展開しつつ、遊撃戦と群衆戦の結合を克取るといふ我々の基本戦略の最初の実践として東海大闘争は、闘いの火の手をあげたのである。

東海大銀ヘルメットの連続的学内制圧闘争は、多様な大衆闘争組織の成立を促し、七・三学園人民戦争の爆発的高揚を頂点とする前期における一連の大衆叛乱として結実化した。

流動制圧戦が権力の麻痺を引起し、追い詰められたブルジョアジーの抑圧が更に凶暴化し、むき出しになり、見さかいない攻撃によって学生大衆自身に権力と自己との敵対関係がより鮮明に理解されるようになった情況下でなされる「ブルジョアジーの攻撃の質を更に上廻る計画された戦術」に基づく反撃は、今一段巨大な学園人

件は整っており、叛乱部隊の戦術は、豊富である。方法はいくらかもある。七一年一月四日の闘争を見よ!!

4、法政大闘争

法政大学は新左翼秩序派を代表する中核派の牙城であり、長年に亘る「無能君主の専制」下において「大衆的学園叛乱の不毛の地」として「民主主義大学」の汚名に甘んじてきた。であるが故に、法政大での共武行運動は他の戦線以上に強固な内容と組織体制を要求され、中核派のキャンピング闘争と区別された独自の叛乱闘争と党派闘争の貫徹を欠いては権力闘争を語る事が意味を持ちえなかったのである。

しかしながら、そうした原則的視点の確認は、曖昧のまま放置され、六九年十一月以降も総長告示（武器の搬入、泊り込み、他大学生の立入り等の禁止による学内支配秩序の維持を目的とする）粉砕闘争をネグレクトして中核派路線への連帯を続け、法政大内第三党派、中核派の尻押し部隊の地位から一歩も抜けでることができないでいた。

我々の七〇年安保闘争の総括が権力闘争の推進主体に応しい転換を全組織員につきつけたにもかかわらず、法

民戦争の爆発を呼び起すのである。

新左翼にとっては単なる状況の悪化としてしか理解しえない「学園支配強化——ロック・アウト、アウシュエイツ体制」というブルジョアジーの抑圧攻撃の強化が実は我々の確固とした情勢把握と戦略に裏打ちされた計画された戦術の主体的推進をもってすれば、権力闘争の突破口を切開く「歓迎すべき契機」へと転化しうるのだという階級闘争の真理を東海大闘争は、身をもって証明したのである。

七・三人民戦争の爆発以降、夏休みの過程で当局の巻き返しに対する反撃に出遅れ、部隊の若干の分散をもたらした東海大では、先進的部隊の孤立化、分断を意図した二千名に及ぶ学友に対する「父兄同伴面接」に対するピラ卷きと活動家の再オルグを通して一〇・五——一〇・八に至る遊撃戦と群衆戦の結合による一大学園人民戦争の爆発を克取った。

拓大の学友をして「当局の攻撃の質も拓大をのりこえ全共闘の反撃の質も我々を完全に乗越えている」といわしめた東海大闘争は、ロック・アウト、アウシュエイツ体制粉砕の基本戦略を確定するための最大の貢献をなした。

一〇・五——八闘争が切開いた地平は広大である。条

政では相も変わらず権力闘争のスローガンと自治会主義的活動がさしたる疑問とも受取られずに同居し、極論すれば「気がむいた時に気がむいた部分が闘争をやる」式の新左翼的水準以下の組織的質をもってしか部隊を結集できないでいたのである。

そうした総括を踏まえた上で設定された六二年館の流動制圧闘争も、「愚かな指導者」によって歪曲され、独自の叛乱の展開が不十分なままその中断による自治会選挙への傾斜↓プロ軍・中核派との党派闘争にすれ込んだため、全共闘大衆の分解を不十分にし、単なる自治会をめぐる党派利害の対立としてしか理解されないという限界を生んだ。

学内支配秩序粉砕（告示粉砕の独自叛乱）↓全共闘内秩序派との対決ではなく、自治会選挙↓ゲバルトに発展してからやっとその本質的意義が秩序派との対決にあるという事実が気付くというテン倒した思考に問題があった。

九月以降の法政大に対する共武行の連続的登場は、適当にロック・アウトを切上げて「正常化」の道をとろうとする当局の目論見を再三に亘ってつき崩し、ロック・アウトを二ヶ月に及んで長期化させ、更には検問を引出すことによって民主主義大学の微温的風土に首までつか

っていた学生大衆の覚醒を促進した。更に、ロック・アウト粉砕闘争の戦略に基く我々の連続的登場は、対応主義的闘争を続けていたノンセクト・青解に闘いの方向を教え、我々の闘争とそれに続く彼らの闘いと相乗作用の中で当局を追いつめる役割を果たしたのである。

十一月二十四日に検問体制下で授業が再開されて以来、法政大の青解、ノンセクトのロック・アウト、検問「抗議」闘争は、新味のない口グバや集会の設定等で大衆的結集力を持たないまま先細りになりかけていた。中核派は、勿論「自分らの不始末」の結果である検問に対する抗議闘争を青解、ノンセクトにやらせつつ後からついていって学内復帰の時期をうかがうといういつもの対応を繰返していた。

当局・権力・新左翼の三者の暗黙の了解の中で検問体制がなれ合的に解除され、なしくずしの正常化が行われようとする矢先の十二月二日、学内に潜入していた〇〇名の革命的学友は、午前十一時半頃に突如武装して登場し、授業秩序粉砕を目指して教室突入、授業粉砕闘争を開始した。同時に他の一隊は、用意していた鎖と錠前をもって五ヶ所ある門のうちの正門を除く四ヶ所を封鎖してしまった。更に他の一隊は、正門に強固なバリケードを築いたのである。

皆と化し、権力が介入しえず退散せざるをえない陣型を布くことができたのである。人は石垣、人は城、敵の武器を我々の武器に転化するという人民戦争の鉄則は、ここでも活かしている。

そして十二月十一日、二日の銀ヘルメットの戦術を自然発生的に真似た青解、ノンセクトの闘争は、ついに群衆戦との結合を克取るに至り、機動隊との攻防戦を数百数千の大衆自らが担うことにより当局を全くの無展望路線に陥れた。法大全共闘は、総長団交を通して検問体制解除をなれ合的にではあれ引出したのである。

戦術が計画化されていず、準備も不十分であるところから、権力の介入に対する備えが甘く、バリケードの構築も中途半端であり、不必要な犠牲者を出すなど彼らの闘争には自然発生的部隊につきものの未熟な点が多く、それはまた、ロック・アウト、検問体制の直接の責任者法大当局、中核派に対する追求の弱さ、特に、ロック・アウトを引出さないためと称して学園の叛乱闘争を抑圧しておきながら、不用意なリンチ事件で自らその原因を作り、しかもロック・アウト、検問粉砕闘争から逃げまわってばかりいて「自己の不始末の尻ぬぐい」を他人にやらせていた中核派を放逐できずに、「中核は第三民青だ」とカゲにまわって愚痴をいうといった「ゴマメの齒

権力は直ちに出勤し、闘争部隊を排除しようとしたが如何にせん、五ヶ所の出入口は全て封鎖され、しかも、自らが法政大当局に圧力をかけて作らせた高さ四メートルの鉄柵が大学の周囲にめぐらされているため、構内に侵入できず、オロオロするばかりであった。自らの本質的弱点をさらけ出した国家権力。機動隊は、革命的学友の投ずる火炎ビンや、石塊に抗し切れず正門前からスゴスゴと立去らざるをえなかったのである。

法大当局は、これまで学内で闘争が起ると直ちに「学外退去命令」を発し、学生大衆を学外に排除したのちに学内で孤立した部隊を権力の手によって捕捉させるか、或は、孤立した部隊が学生大衆の後を追って学外に退去するのを待つかそのいずれかによって事態を切抜けようとしていた。しかるに、一二・二当日は、法大の一切の門が封鎖されたため、学外退去命令が出せず、「学生は、校舎内に入れ」という命令を繰返すのみであった。ところが銀ヘルメットの学友によって教室での授業が粉砕され、キャンパスにおいては検問に従事していた教職員は、追求めや打壊しが続いているため、検問体制に反発している大衆は、一向に立去る気配をみせず、鉄柵の内と外に膨大にたまったのである。その結果、鉄柵と検問所に周囲をかこまれた法大は、叛乱部隊にとって一個の城

「ぎしり」的対応を一步も抜け出せない彼らの限界にもつながっている。

それはさておき、連続的遊撃戦↓ロック・アウトの長期化↓検問体制下での授業再開↓更なる遊撃戦と授業粉砕、バリケードによる大衆のブル↓遊撃戦と群衆戦との結合による権力との攻防（学園人民戦争）↓展望を失った当局の屈服という当面する基本戦略の正しさは、法大において立証された。東海大・法大において正当性が立証されたこの戦略の下にロック・アウト、アウンシュヴィッツ体制下におかれている他の学園職場の支配秩序粉砕闘争を独力でも展開しぬき、その全国的波及を克取ること、それを担い切る労学行動委、共武行の組織的確立が今こそ問われているのである。

法大における主体の側の限界は何か。

それは、我々の連続的遊撃戦の展開自身がロック・アウトを長期化させ、同時に青解、ノンセクトの闘争を触発したこと、その限りで彼らの闘争は我々の戦略の一環に位置づけられるべき性格を有している事実が理解されずに、彼らの闘争を我々の闘争とは何か独自の外的な存在であるかに捉え、我々が彼らを牽引するのではなく彼らの行動に引きずられる傾向が発生したことである。こうした傾向は、当然にもロック粉砕闘争の戦略・戦

術を軸として全共闘に切込み、党派闘争を貫徹しつつその革命的再編を遂行していく努力を回避する傾向をも生ぜしめた。七〇年六月において中核派と結託して革命派に敵対してきた彼らになれ合い的に関わっていたことなどがその例である。

この消極性が大衆に対する情宣や全共闘に対する切込みが問題とされながら法大路線としてそれを主体的に組織化するのではなく、共武行の指導部の提起を受動的に受取めながらそれに関わっていくという対応にもつながって行くのである。その結果、ロック粉砕闘争の全共闘就中核派による集約を一時的であるにせよ許してしまつたのである。

しかしながら権力に同調し、ロック・検問攻撃をとつた当局の責任追求が曖昧にされていること、我々の戦略的課題があくまで学園支配秩序の解体と秩序の中にくぬくと安住しようとしている新左翼の解体→全共闘の革命的再生にあることを見るならば、我々の闘争は、まさに、これからであることがはっきりするだろう。

我々は、自らの実践を通して中核派のちより落と無力化、青解、ノンセクトの相対的独自化という法大全共闘の分解傾向を促進せしめた。

今や、学外から間接的に学内に登場するのではなく

△第二報告▽組織総括

権力闘争を担いさる組織を我がものとせよ!

——第二次組織革命への進撃——

一、組織内革命の進行について

——十一月敗北により明らかにされてきた我々の位置、それに関連した組織内論争諸点——

(一) ① 十月十一月の敗北をめぐっての総括の中から新左翼諸派との同地平において党建設を行なおうとしたこと。

② それ故に闘争設定自体が単発の積み重ね、スケージュール闘争、十月の軍団編成における突撃型闘争等の技術面におけるカンパニア性を払拭しきれなかった。

③ これらのことは我々の運動自身が一大潮流として存在しきれずに新左翼戦線の一環、もしくは補充物以外にはなりえなかった。

④ 我々は犯罪的にも多くの先進大衆を、むざむざと新左翼、玉砕シヨ一のえじきとさせてしまったこと、

連日の学内制圧闘争を組織し、学内に前進基地を設け、更なる学園反乱を追求する条件ができたのである。

同志諸君!!

七一年は組織の総力を挙げた一大攻勢の年である。その期は熟した。鉄は熱いうちに打て!

つまり権力に敗北すると共に内部にいて革命の実現をはばむ新左翼にも敗北することとなった。

(二) こうした総括において我々は権力闘争の時代において、もはや独力で新旧左翼の解体を通して工場占拠のソビエト運動を行なわなければならないことを確認した。

こうした頃組織内部では「カンパニア闘争是非論争」が行なわれていた。この論争は我々独自の権力闘争を行なうにはいかなる路線が問われているのかについての解答をあいまいにすることによってもたらされたものであった。この様な事態は七月にまで長く持ちこたれることになる。

(三) 四月に入り、法政大におけるプロ軍との党派闘争が現実化してくる。この時にまだ我々はブルジョア政治の枠内から脱げることができずに、どう喝に対する逆どう喝によって対等な立場での妥協において事を済

ませた。この弱腰の対応が五月における防衛的党派闘争に追い込まれる要因となる。

④ 全学連自治会運動を否定しつつ、かといって居直り自治会―内実の行動委運動にもなりきれないままに自治会ベースでプロ軍に党派闘争の先手を取られ、故にゲバルト自体もあいまいな防衛的ゲバルトとして展開せざるをえなくなる。

(五) なしくずしのKPとの党派闘争へ。

組織内部の足の乱れとプロ軍との対応から弱腰とみた中核派のかさにかかったゲバルトに対する敗北。

(六) いっこうにカンパニア性を払拭しきれないままの六月闘争における重なる敗北。

(七) 組織内革命の開始。

四〇号論文の提出による組織内なれあい体制の暴露―様々な組織的欠陥に対する指摘としての組織内論争を呼び起こす。だが全体的に問題点が明確であるというのではなく、個々分散的な問題提起の段階をでてはいなかった。提出された問題としては次の通りであった。

① 六九年十、十一月以降の総括―カンパニア闘争是非論争

② 組織体質―なれあいの組織性―鳥井問題・山内問題

出したものの革命党―革命指導部の未形成故に権力による全面攻撃の前に労働者本隊未登場のまま後退から停滞へと陥いらざるをえなかった日本階級闘争の現状を打破し、真の権力闘争へと労働者階級の先端をいきる革命党はいづこ。破局に類した一九一七年ロシア十月に「全権力をソビエトへ」のスローガンと共に革命の真の指導部として登場したボルシェヴィキのごとく、戦後階級闘争の中で民主主義左翼として育成された新旧左翼に対し、「工場占拠―ソヴィエト権力樹立の権力闘争へ」を大たんに掲げ、全闘争をソヴィエト権力形成に向けたものとして進み得る革命党はどのように形成されつつあるか。今こそ我々は一切の民主主義幻想の枠を乗り越え、水ぶくれし老化した組織から、右手に銃を携えた若々しい組織へと転換しなければならぬ。だが現状はまだ組織的統一性―躍動力を持った真の革命党への道は切り開かれてはいないと見なければならぬ。その第一歩を我々は踏み出そうとしている。

八月期の組織再編の過程において我々は論争から一歩足を踏み出し、「口先だけの指導部から実践の指導部へ」と進んだ。八月の闘争において我々の目指したものは「計画され、組織化された戦術」であった。

題

③ 法大闘争の総括及び六月闘争の総括をめぐっての論争

④ 地区体制の未成熟―全体的有機性の欠落
主要にはこうした事であったが、問題点は分散的傾向にあった。と同時にこの組織内革命の問題は大衆化実践化の方向を持たずに論争の域を脱しきれないまま山内除名問題へと進行する。

(八) 山内除名問題に関しては彼個人に対する問題点が焦点化しそのみの次元においてすでに除名の根拠が確認されてしまふことよってさらなる革命の波及としては、非常な不充分さを伴う面があった。この場合、彼のそうした問題点自体を是認してきた組織のあいまい性に対する切開は後の漸次的な進行にまかされたまま現在まで持ちこされる。

全同盟的に結集された全ての同志諸君に対し我々の歩んできた路程と権力闘争の指導部として要求されている我々の現在の位置を再度見つめ直すことを要請した。

―八月以降の我等の歩み―

激化する世界階級闘争の中で、六八―六九年段階で先行的全国学園占拠闘争において権力闘争の芽を産み

その意味において我々は旧来持っていた誇大な宣伝とあいまいな戦術という新左翼なみのカンパニア的闘争設定に対し、戦術にあわせて理論を引き下げるのではなく、理論実践に向けて緻密な戦術と組織形成を行なうなら、いかなる闘争設定も消化することができることを身をもって知ったのである。こうした教訓を踏まえ、八月合宿の内部における論争を行なう中に権力闘争の時代にその指導部として自らを位置付け、全てのカンパニア左翼に対する党派闘争を展開することを辞さずにむしろ攻撃的党派闘争の中から肥大化、散満化された日本のプロレタリア戦線を権力闘争の単一指導部へと結集させる任務を確定したのであった。

ではいかなる内容をもったところで革命党の形成が要求されているのか、そして権力闘争の時代とはいかなる時代としてあるのだろうか。一言でいうなら「ソビエト構築を緊急の任務とし、プロレタリアの全戦線をそこへ収約する」ことである。これに対し、新旧左翼は共に一九一七年代におけるナロードニキ党もどきの誤診を再び繰り返そうとしている。彼らは革命の基礎単位を認識できぬままに、あるいは経済主義、政治主義のどちらか二元的なだれ込みとして先進的叛乱大衆を引きまわしている。こうした諸党派は権力闘争の

時代に入ってはじめて馬脚を現わしたのである。我々は当面の戦術がいかに似かよっていようと、我々の組織路線の見地からするならば、曖昧な態度で接していくことはできない。「全力量を工場占拠―ソビエトMの権力闘争へ」と大たんに踏み出さなければドイツの悲劇を再度繰り返すことになる。そして我々はこうした権力闘争―ソビエト構築にみあった型での真の権力組織として旧来的な同盟組織から共産主義武装行動委への組織転換を提起してきたのであった。(武装五号山野刃論文参照)

だが戦後階級闘争のカンパニア性に深く侵蝕された同盟組織自体がすぐさま新たな組織へと転換することはでき得るわけもなく、解体再編という過程を経なければすぐにはできないであろうことも確認している。我々の九月以降の組織路線とは次の通りであった。まず峰起―世界革命戦争―世界共産主義を実現するべく当初からソビエト構築を目指した権力闘争体としての大衆行動委形成―大衆武装を組織する武装部隊としての共武行(CAAC)。それはおのずから共産主義的内実(綱領的結合)を持ったものであらねばならなかった。何故ならばCAACの念頭にあるのは常にソビエト峰起であるからだ。七〇年代権力闘争の時代にお

軸としての実体的組織建設にとりかかったのである。こうした闘争の中から、権力の盲点、弱点、組織的戦術の確定をほぼ成しえたとみていいだろう。

CAAC―共産主義武装行動委建設へ

従来から出されている組織形態論のカンパニア性に対し、ソビエト峰起を念頭においたCAAC組織は先にも述べた通り、旧来の党―活動家集団―大衆組織の領域をはるかに踏み出さざるを得ない。又、党―軍―統一戦線などの峰起戦略の決定的誤まりからくる組織形態論とも異ならざるを得ない。我々自身権力闘争に對する取り組みの甘さ、新左翼に對する屈服性などから単なる組織的教条主義―組織形成の為の組織的党―活動家集団―大衆組織といった実体的内容を伴わない活動家ブール組織の方針をとってきた。だが今や権力闘争における現実的諸任務―革命に向かう共同体基礎単位形成を実現すべくその任務に規定されたところで組織実体を確立しなければならぬ。

我々は六〇年代闘争を通じて次の諸点を確認した。

○ 日本資本主義の相対的安定期を終り、民主主義体制に破綻をきたす中から議会幻想を媒介にした支配体制、労資協調、歩みよりによる妥協体制にみきりをつけ、直接的秩序維持暴力―法治強化の執行権力独裁体

いては、六〇年代にみられたような自然発生的叛乱エネルギーはその萌芽的段階からすでにブルジョア権力の壁を持っており、権力の攻撃自身もはや民主主義幻想(支配形態)を自らぶち破ることにまよって直接的に弾圧と搾取の権力支配へと移行している。であるからして単発的「峰起」、叛乱は当初から武装對峙の質を要求される。だが新旧左翼を含めて叛乱大衆はこうした暴力装置に對決し得るような明確な組織戦術は持っていない。或いは先進資本主義国では問題にならないようなクーデター方式の街頭革命路線をもって労働者大衆を死へ追いやり全面的敗北を招かざるを得ない。又一方においては工場―職場における監視労働の強化学園におけるアウシュウィッツ化、地域的戒厳体制の中でもって叛乱的エネルギーは徐々に消耗させられつつあり、そうした叛乱エネルギーを日程的カンパニア集会、デモへと流し込もうとする反革命的傾向までが生まれてきている現在、我々の形成すべき組織と、その実践方針は極めて現実性の中から要求されてくる。一九・一一・一〇・五一一二・二下こうした実践的成果の中から我々はCAAC運動の第一歩を踏み出した。八月闘争において得られた組織的躍動性を更に押し進めるものとして、内部階級闘争、対ロック闘争を主

制へ移行することにより組合的取り引き闘争、街頭実力行動による反政府―政策阻止闘争が限界性を現わし、単なる自己満足の行動に転落した。もはや権力闘争の時代に突入したこと。

○ 大衆的実力占拠闘争が学園―街頭で高揚したが、権力の直接支配体制の強化と新左翼による反政府―政策阻止、組織形成―主体形成への流し込みにより戦後民主主義体制の尾を断ち切れず、権力の壁に阻まれ工場占拠―ソビエトMにまで発展しなかつたこと。

○ だが全国学園占拠闘争により、権力闘争の布陣が明確化した。と同時に工場占拠闘争が非合法の純権力闘争として発展せざるをえないため、その波及が学園におけるような民主主義自治幻想をともなう比較的容易であったのと異なり、当初から武装―蜂起の質が問われ組合意識の延長に設定した場合に必ずや敗北への道を歩まざるをえない。故にその準備過程は極めて非合法的であり、自然成長性を一切排除したところでの目的意識的結合―叛乱でなければならず、発生様式は自然発生的であろうとも解消地点はプロレタリア権力樹立―ソビエト権力への集中としてなければならぬこと。

以上の確認から我々は活動家養成所としての大衆組

織—共産主義者候補活動家ブール—強化された主体、革命プロフェッショナルとしての党といった街頭ハネハネ、もしくはイデオロギー学校をもって組織を拡大し、人民の自然発生の決起を待つ機会があったら政府を倒そうというカンパニア組織論からはっきり決別し、いや決別するだけではなくそうした主体形成論を内実とする革共同を先頭とする新左翼を冷徹に粉砕することまでをも含めて当面する任務を推し進めなければならぬ。もう一つ近來特徴的にある軍事問題に焦点をあわせることによってクーデター方式の革命論とブルジョア権力構造と交わらない組織論を提起している諸君もある。だがこうした諸君は権力論自体に非常に重大な誤りがあることを知らず、プロレタリア権力とブルジョア権力は単にイデオロギーの相違であると思ひこみ、組織論自体は旧來通りの組織に単なる軍事問題をつけ足したにすぎないのである。これも我々にとっては打倒対象である。C.A.A.C.とは党綱領、戦略に基いてソビエト蜂起を遂行する組織である。それを準備する組織である。武装された共産主義者としての主体である。具体的行動でもって権力の現状における支配を一つ一つ突破する組織である。学園においては闘争を永続化させ、泥沼化させ、大衆的に機動隊を粉

砕できる状態—学園人民戦争を常に追求する。ロックアウト秩序強化に対しては絶えざる報復と破壊をもって権力を震かんせしめ、泥沼化させ、もはやロックアウト攻撃は二度とできぬ位たたくのめし、全国的恐怖とする。又新左翼が闘争をカンパニア的に集約させたなら、徹底的な実力解体を行う。そうした行動をもって武装力戦術の深化、部隊の強化を身につける。又そうした学園武装制圧をもって工場との結合を追求する。日常的工場ピラマキ、職場への浸透を進め、工場占拠への布陣を設く。工場—職場においては日常的な職制—労働のつるし上げ、組合の反動性無力性の暴露—組合官僚の粉砕を通し職場内部に叛乱エネルギーを蓄える。職場外での武装闘争に対する積極的参加により武装力、戦術、部隊の強化を行う。職域の閉鎖性を突破し、重要戦略産業の基軸 工場にむけた包囲の布陣を全体的戦略の中から導き出し、そうした布陣の形成にむけ常に地区的結合拡大として問題をたて、それに従って自らの任務を設定する。当初から地区的結合に基いた工場占拠闘争をメルクマイルとする。それに向き叛乱エネルギーのひろまった職場においては日常に職場内流動制圧を貫徹し労働—職制を実力でもって追放する。一度決起に踏み切ったら、右派第二組合策動、

組合的集約に対して実力でもってせん滅戦、掃討戦を行なう。こうした現実的任務を緻密に追求し、全戦線工場占拠へとおし上げる特殊工作隊—遊撃隊としてパルチ組織形態をとった地域的組織でなければならぬ。ここにおいてC.A.A.C.の個人は諸闘争に対する関わりが外在的なものであっては決してならない。旧來における外からの指導という形態はカンパニア闘争特有の形態であり、例えば一九一七年四月におけるレーニンの立場は国内に在ることと亡命地における指導体制とは決定的な隔りがある。そして共武行のパルチは単細胞分裂的に常に増殖し、発展的に見るならばC.A.A.C.一員が一パルチを組織する。そしてパルチ員は常にC.A.A.C.として自立を要請される。我々C.A.A.C.が高らかに掲げる旗は「むき出しの暴力」である。

我々は、九月以降こうした路線へと一歩一歩あゆんできた。だがそれは容易な作業ではなかった。左翼の大衆は新左翼意識、反政府—街頭カンパニア意識に骨の髄までドブブリひたりきっていたし、我々の旧組織自体がそうした面を根強くもっていたし、又今も持ち続けている。又当面する我々の任務が学園にしばられざるをえなかったため（何故ならこうした質を一挙に工場に移行するには余りにも未熟であり、六月以降

からの中核派との闘争をひかえていた。）内部から学生至上主義ではないかなどの誤認の声なども流れていた。だが我々は現実の中では一歩一歩進まざるをえないし、その遅々たる進行故に或いは闘争の苛酷度故に崩れて行く部分も多数あった。だが我々はこうした権力闘争へと踏み出そうと決意した瞬間からそれらの困難は予知していたし、曖昧な形で身重な組織を引きづって歩くにはあまりにも危険な作業であった。我々の踏み出しは躍動的な奔放な組織として出発せざるをえなかった。故にそのやり方は組織内部においても秘密めいたよく解らないものであったに違いない。だが我々は旧來通りの組織内容ではやっていけないことはすでに明らかになっている。そして早急に実践指導部—C.A.A.C.指導部の確立を行う必要があった。我々はこの同志諸君と共に次のことを確認しなければならぬ。「実践主体による実践的指導部を確立せよ。」と。だが現時点においては、そうしたC.A.A.C.運動における主体はまだ部分的であり、全体的波及力を持ちきっていない。我々は全組織内部に向け鋭い切り込みを行う必要がある。

二、第二次組織内革命に向けて

現在まで組織内部において七月八月における内部革命が真に実体化、深化されているとはいえない。だがその問題が及ぼした影響によって指導体制の形がいはゆる露呈と諸点における問題性が明らかになってきた。全体の戦略性を欠いた地区の分散的方針とその寄せ集めの全体路線の性質は、緩慢で不均質な組織体系を結果としていた。又そうした体質に欠陥はいざ実践の段階になると戦術イメージと組織体制のギャップの故に必ずやミスを生ずることになってきていた。確かにカンパニオンの力学運動の中では若干のミスであるならばどうにかおぎなえたかもしれない。しかし全革命戦略を現実の中で戦術として駆使しなければならぬ権力闘争の時代ではそうしたミスは絶対に許されはしない。我々は今や老化した組織の殻を脱ぎ捨てなければならぬ。武装された党ソビエト蜂起を任務とした「A A O I 生産過程に基礎を置いた半武装大衆（大衆行動委）」による左翼戦線に対する革命的独裁を貫徹しうる組織へと我が青年共産同盟を解体し再編する必要が現実の中で叫ばれている。我々はここに第二次組織内革

命の推進を大胆に提起する。我々の旧来的組織は如何なるものなのか。革命の指導部たりうるか。残念ながら現在まであった組織に対しては、「否」という答を出さざるをえない。これは全体組織の連絡会議への落ち込みと地区組織の分散化と地方主義に原因している。我々は六八年段階から綱領の獲得、綱領による結合を追求してきた。確かに理論的視点から見れば、我々はすぐれて先行したところにその作業を行いつつあるし追求は深化されている。しかしながら実体的ない理論が何をすることが出来るだろうか。又実体化されない所での綱領などは何の意味も持ちえないのだ。同時に我々は次のことを知らなければならぬ。「原則綱領が戦略綱領か」という二者択一の問題設定の領域から大きく踏み出さねばならないことを。つまり共産主義実現に対しての関わりは常に現実の中に存在するものであり、概念の中では二分化されてある言辭でも現実社会にその言辭を積極的投機した場合には全体的に一つの運動としてあらわれてくる。共産主義運動が人類の歴史に対する生への展望であるならば、その運動の枠組、現実と運動主体との葛藤を真に内化されたものとしてなければならぬ。単なる理論の一致、批判の自由ではないのだ。だが組織のこの状態をもた

らしたものは組織の根としてある地区組織の性格にある。

——地区組織とは何か——

我々は六八年組織発足以来一貫して工場占拠ソビエト構築に向け全組織体制をくんできた。原則における叛乱組織論に貫ぬかれた人民の直接的自発意志を基礎とした大衆組織の建設として安保粉砕行動委とその調整統合組織としての安保共闘の形成過程は、我々にとって困難な道ではあったが現在数多くの行動委を産みだすに到っている。だがそうした運動を地区的に統合連結しようとした時に新左翼と同平面における失敗を犯してしまった。一面における現実を遊離した全体戦略、一面における全体的戦略性を忘れた地方主義として現われた。ここにおいては全体戦略における獲得を組織形成一党形成へと流し込む革共同を先頭とするやからの表裏的側面を、わが組織内部へと反映させてしまっていることを確認せざるをえない。もちろん新左翼諸派のようにそうした傾向を理論として極限化するようなことはなかったが。我々は地区単位の結合体を単に組織的な面でも便宜的に設定したのではない。あくまでもソビエト形成を当初から目的にした、また

形成の基礎単位を地区として表すべくその基本軸を地区委に置いたのであった。だが新旧左翼の歴史の中で延々と続いた労学の表面的分離を克服しきれないままに地区組織自身が労学の協議会になっていく傾向を深めた。それは地区の重要基幹部門を軸とした一地区ソビエト間結合の全体的統合と戦略的高地への集中を疎外することを結果とした。集中の軸と運動の修熟に欠けていたのであった。こうしたことは地区委において行なわれている運動が地区反戦の域を出ない学習会、コネツケ運動としてあり、戦略高地の実現がないための地方主義を産みだすこととなるであろう。例えば地区反戦などでもそのようなだが地区規定にブルジョア区画をそのままあてはめ、その中で息のかかった活動家のいる地点を捜し出してその協議会を持つことによってその状況にみあったところでの運動方針を提起するやり方がある。しかし我々の革命戦略を基礎とした問題設定の場合ソビエトとしての影響力を広く持ち生産力の扱はずした重要基幹部門にある工場を現状から割り出すことにより、その重要高地としてある基幹工場に向けて我々の現状勢力による任務配置を高地へ向かった包囲体制として組むことによって集中的攻略戦を行なわなければならない。そうした戦略配置に基

た地区規定と地区組織の配置を行なわなければならない。ここにおいて地区指導は全体戦略、全体組織戦略をあくまでも先行的にみる中で、の任務地区における運動構築と、その全体への波及度と還元度によっての流動的地区変移と機動性、遊撃性を持った外延的進行戦をも行わなければならない。こうした地区編成とその実践的指導部形成の道へ進むことなしに我々は一切権力闘争という言葉を語ることはできない。

もはや我々は問題の全てを切開することなしには明日を語ることはできない。新左翼の解体なしには前進をのぞめない。組織内革命の全国的波及と深化をもって強固なる結合を獲得し、鋼鉄の組織へと再生せよ！

〈第三報告〉情勢

世界革命戦争へ！

われわれは「五月のフランス」を突破しなければならない！

(文責 山野辺 建三)

A 世界階級闘争の現局面

1、最近の特徵的闘い

一二月に入ってから以降、ごく最近起きた諸闘争をとってみただけでも、われわれは、その中に重要でかつ特徴的な闘いが頻発していることを知ることができる。

△第一にヨーロッパにおいては、イギリス、イタリア等の先進帝国主義諸国で、労働者階級の激しい闘争が展開されている。とくにイギリスでは、保守党政権登場後、本格的なブルジョア執行権力独裁体制への移行が進行し、彼らは、労働者の賃金抑制と、組合統制外で続いている「山猫スト」弾圧のために「労使関係法」の制定を試みている。これに対し、すでに現在までに中止されたとはいえず、送電ストップまでも貫行した電力スト、一

二・八セネストなどの闘いが生まれ、これに対して、保守党内閣は、非常事態宣言をもって応戦している。

またイタリアでも、昨年一一月の大闘争以降の停滞状況から、ふたたび執拗な労働者、学生闘争が起きていく。一二月一四日のセネストは、全イタリアの $\frac{2}{3}$ をまきこんで闘われ、ミラノ暴動など小規模ながら「一一月」型の闘争が追求されており、伝統的に弱体なイタリア中道政府(コロンポ内閣)を窮地に陥れている。

さらに、スペインでは、「自由バスク」を中心とした民族主義的都市ゲリラ闘争がまき起り、政府の弾圧とそれに対抗したゲリラの西独総領事誘かいなどがくり返されている。それは、単に、民族主義的分離運動として存在しているというよりも、むしろ、バスク問題をきっかけとする労働者・学生・市民の、フランコ独裁に対する階級的闘いへと発展しつつあり、それはついに一二月一

四日、事実上の非常事態宣言が発せられるに至ってゐる。

そして、東欧にあつても、同じく一二月一四日、ポーランド第三の港湾都市グダニスクとその周辺都市において暴動が爆発した。ゴムルカ政権の打出した食糧物資の平均二〇%値上げをきっかけに、学生・労働者の抗議デモと港湾造船労働者のストライキ、民警との衝突、警察署、統一労働者党本部襲撃が展開された。さらにそれはシチエチンやカトピッツなどの諸都市に飛び火し、各地にストライキ・サボタージュを巻き起している。ここに、チェコに続く新たな東欧労働者階級の闘争が激発し、ソ連経済への不均衡貿易による依存と西欧経済圏の圧力との間に、矛盾を露呈しつつ、行政的官僚支配によって糊塗されてきた東欧における労働者反乱が、ふたたび登場したのである。

こうして、ヨーロッパ階級闘争全体は、六八年フランス、六九年イタリアの労働者階級による空前の占拠ゼネスト以降、現在なお間断なく先鋭を闘いが続いている。

△第二に▽アジア大陸においては、その東南地域での解放革命戦争が一層拡大深化しつつある。

まず、ベトナムで戦端を開いた民族解放革命戦争は、

△第三に▽南北アメリカ大陸においては、北はカナダから、南はブラジルまで、武装ゲリラ闘争が、現段階の最も普遍的潮流として買われている。

まず、カナダでは、周知の如く「ケベック解放戦闘（FLQ）」による都市ゲリラが吹き荒れた。とくに一〇月初め、政治犯の釈放を要求して、クロス英商務官、ラポルト州労相を誘かいした闘いは、「ケベック・ウォー」の一つの頂点を築いた。このFLQの闘争は、表面的には、カナダにおける少数民族たるフランス系住民の「民族運動（分離・独立）」としてあらわれている。しかし、その本質的性格は、アメリカの黒人解放闘争と同様、下層労働者階級とその子弟を主体とした、英語系連邦政府と帝国主義支配を打倒する革命闘争以外の何ものでもない。したがって、ケベック・ウォー各派の結集も、不断に階級的分化と質的發展を問われ、アメリカ国内をはじめとする武装ゲリラとの連帯と、一つの革命戦線としての結合をめざす地点にまで達しつつあるのだ。

一方、そのアメリカ本国内にあつても、今年に入ってから、実に無数のテロとゲリラが激発した。ブラックパンサー、ウェザーマンなど、これまた無数のグループによって、爆弾、火炎ビンを用いた、警察・裁判所・工場等に対する爆破活動、警官その他への狙撃・襲撃が、ほ

解放区・革命権力の拡大と、アメリカ帝国主義の反革命介入によって、インドシナ全域にわたり展開されている。とくに、カンボジアは、米軍の力を背景にしたクーデター以来、米軍・南ベトナム軍の直接侵略と、革命軍のそれに対する巻き返し、政府軍の分断化がくり返されており、解放区・二重権力・革命戦争として「第二のベトナム」となっている。

また、ラオス、タイでの武装闘争の開始、インドのナクサライトによる土地革命運動の進展、パキスタンにおけるベンガル民族主義の台頭など、戦線はますます拡大しつつある。

一方、南ベトナム自身では、一二月七日の米兵による少年射殺事件（クイニョン事件）と、韓国兵によるデモ中の兄妹射殺事件とをきっかけにして、一二日夜以来、首都サイゴンを始めとする各都市で、学生によるテロ・ゲリラ戦が開始されている。サイゴン学生連盟は、公然と、対米軍・韓国軍への攻撃を宣言し、軍用車輛の焼打ち、米軍宿舎の爆破、米兵襲撃を敢行しているのである。かくして、南ベトナムでは、農村における解放区・革命戦争と都市におけるパルチザン戦とが、具体的に結合される段階へと一歩一歩煮つまつつつある。

とんど連日にわたり、全米各地のいづこかでくり返され、それはニクソン政権の北爆再開を新たなきっかけにして、現在までも継続されている。

また、南米のブラジルでは、六四年段階から、左翼民族主義グループが分化しはじめ、武装ゲリラ闘争による解放運動が展開されてきた。昨年九月以降、四度目の誘かい（スイス大使）が、この一二月にも敢行され、都市ゲリラの存在が強力であることを示した。この他、ウルグアイの民族解放運動（ツバマロス）をはじめとして、南米では、軍事独裁政権とアメリカ帝国主義権力に対する武装（都市）ゲリラ闘争が、明らかに強力な潮流として定着化しつつある。

こうして、南北アメリカ大陸を貫き、鋭く展開されている武装（都市）ゲリラ戦は、それらの闘いの普遍性・均質性にもかかわらず、未だ統一的・計画的な全体としての革命闘争の指導部を構成しえていないとはいへ、六〇年代とは比較にならないほどの力量を蓄積してきていると言えるだろう。

以上みてきたように、東西ヨーロッパ、アジア大陸、南北アメリカ大陸等、世界階級闘争は、殆んど全大陸にわたって火を吹いてきている。この事実をふまえながら、われわれは現在、みずからがどのような戦略的位置に立

っているのかを、再度確認しなければならぬであろう。

2、世界階級闘争の現段階と われわれの戦略的展望

(1)戦後の帝国主義世界体制の動揺と崩壊に対する世界階級闘争の発展は、ほぼ次のような過程を経てきた。

まず、六三年〜六五年の段階にあって、ベトナムにおける解放革命戦争が、突出した闘いを展開した。

ベトナム人民の解放闘争が示した革命的意義は、第一に、軍事かいらい政権とアメリカ帝国主義に対するその武装闘争をおし進め、戦後一貫して荒廃にさらされてきた後進国経済の破綻に対し、生産の社会主義的組織化を開始したこと、それによって公然たる解放区一二重権力を構築し、従来の後進国における「民族」運動の枠を突破したことであり、第二には、そうした闘いが、帝国主義の包囲と米ソの取引きを基礎に形成された戦後世界の政治軍事体制の枠をも、事実上突破し、対米革命戦争の先陣を築く世界的位置を獲得したこと、それによって、未だ戦後型の体制内闘争にとどまっている階級闘争の全戦線に対して革命的インパクトを与えたことであつた。

だが、この時点にあっては、とくに先進帝国主義国内

部の労働者階級の闘いは、ほぼ全面的に組合主義議会議的運動に終始しており、わづかに部分的に、そうした体制内闘争の限界と破綻が生じつつある段階であつた。

むしろ、そこでは帝国主義支配階級の側から、経済的矛盾の顕在化につき動かされて、政治的、経済的引締め戦後支配体制の再編成、執行権力独裁への移行が先行的に着手されたのであつた。とりわけ、通貨戦争と輸出競争をおして、E.E.C.をめぐる政治的、経済的ヘゲモニー争奪戦を激化させていった西ヨーロッパ諸国において、その傾向は著しく、帝国主義国家権力の労働者階級への攻撃が熾烈化したのであつた。六八年にいたり、それに対する大規模な反撃が開始された。周知のように、それは、経済危機の深化の中で、六八年五月のフランス、六九年のイタリアにおいて、革命的労働者階級の工場占拠ゼネストとして爆発した。この二つの闘いは先進帝国主義国で戦後初めて労働者階級の権力闘争が、体制内闘争の枠を突き破って登場した点において根本的意義を持つものであつた。たしかにそれは、自然発生的な大衆反乱の性格を強くもつてはいたが——またそれゆえに敗北させられたのではあるが——しかしました、明らかに目的意識的な闘い、労働者階級の権力を組織する闘いの萌芽にほかならなかつた。

ここにおいて世界階級闘争は、労働者階級のソヴェト

権力と革命的農民のコミューン権力とを現実の日程にのせ、プロレタリア世界革命の陣型を具体化する基礎的条件をもつ段階へと突入したのである。

六九年以降の全過程は、最初に確認したように、こうした革命闘争の端緒が東欧を含めた全ヨーロッパにおいて、激動のアジアにおいて、南北アメリカ大陸において次々と切り拓かれてきていることを告げているであろう。

(2)以上のように、現在は、革命闘争の波が世界の基本的動向となり、帝国主義支配を世界的に覆す力を生み出す労働者階級、被抑圧人民の闘いが登場する時代である。そして、いうまでもなく、その客観的条件は、帝国主義の戦後体制そのものの破綻と危機の深化にある。

戦後世界は、帝国主義の政治軍事支配を西ヨーロッパと日本において確立し、それによって、ソ連、東欧、中国を包囲することから出発した。そして、それを保障するものこそ、アメリカ帝国主義の軍事力とドル援助にほかならなかつた。

西欧、日本の帝国主義国家は、その保障の下に、戦争後の階級闘争を体制内化させ、資本主義的経済復興を推進し、組合主義労働運動を基礎とする議会制民主主義体

制によるブルジョア支配を形成していったのである。

西欧、日本の帝国主義の植民地であつた大部分のアジア、アメリカ諸国は、第二次大戦後、むしろ、一貫してアメリカ帝国主義の軍事力に直接依拠した軍事政権によって保持された。したがってここでは、経済的にも問題は、何一つ解決されないまま、アメリカの軍事体制とそれにかまつわるドル撤布によって、外的に維持されてきたに過ぎなかつた。

東欧諸国と中国は、帝国主義体制から離れ、東欧はソ連の軍事力と経済体制に組みこまれ、まもなく、中国は独自の「自力更生」に入った。

だが、こうした政治的、経済的戦後体制は、西欧諸国、日本の帝国主義的発展とドル危機の顕在化、帝国主義相互の対立の激化と帝国主義諸国内部の階級関係の緊張、後進国軍事支配の動揺と解放闘争の前進という形で破綻しはじめたのである。すなわち、国際的には、国際通貨体制の破綻と輸出競争の激化、そして米ソ取引体制の麻痺と解放革命戦争の進展であり、国内的には、階級対立の激化、とくに先進帝国主義国内部での戦後国内体制の破綻と執行権力独裁、および、プロレタリア権力闘争の登場であつた。

一方、東欧、ソ連圏の場合には、帝国主義ブロックか

らの軍事的包囲に対する防衛から、ソ連の軍事力を軸とするブロックを形成した。それは、経済的には、東欧諸国が、ソ連への原材料、食糧の供給国として、また、ソ連が工業生産国として編成されたものであり、軍事的には、ソ連にとっては、西側からの軍事防衛の前線として設定されたものであった。

したがって、五六年代に入って、E.E.Oを中心とする帝国主義諸国の産業的發展が進むにつれて、その東欧諸国に対する経済的、政治的圧力は強まり、国内の階級的矛盾は一層激化された。五六年度のボズダニ（ポーランド）反乱、ハンガリー暴動は、その典型的な表現であった。西ドイツ帝国主義の飛躍的發展は、とくにポーランド、チエコスロバキアの両国に対し、強力な分解作用を与えている。しかも、米ソ体制の流動化によって西ドイツの独自の対東欧宥和政策が進められ、政治的にも、ソ連東欧ブロックはゆさぶられている。

かくして、ナチスとのバルチザン戦から戦後危機の過程をおして昂揚した東欧プロレタリアート農民の力はソ連と東欧各国共産党指導部による官僚的、行政的な「社会主義化」政策に抑えこまれてきたが、今や、帝国主義世界体制の危機の開始とともに、ポーランド、チエコ等の革命的労働者階級の現体制打破の闘いは不可避とな

っているのである。

他方、中国の場合には、広大な国土を利して一応「自力更生」路線を歩んだが、帝国主義諸国、および、ソ連からの自立は、国内産業の主軸を圧倒的に農業生産に依拠せざるをえないことを意味していた。したがって、中国にあっては、農業それ自身のもつブルジョアの制約から、国内階級対立が不断に形成される性格をもち、富農党行政官僚、高級軍人に依拠するブルジョアグループとそれを引締めようとするグループとの間に階級闘争が永続的に展開されることとなる。そして、アジア大陸内部における解放革命闘争が、そうした内部の階級闘争に強力なインパクトを与えているのである。六〇年代後半の中国文化大革命の客観的性格は、まさにそのようなものとしてあった。中国の革命的人民は、来るべきアジア革命のダイナミズムの中に合流し、巨大な革命派大衆として結合しうる可能性を示したのである。

以上、改めて確認するならば、帝国主義世界体制の崩壊の開始は、その政治的危機と経済的危機とを一体化させながら進行し、革命的労働者階級人民を、新たな歴史の主体として、ますます広範に登場させ、帝国主義支配階級とその権力を打倒する世界革命の時代が開始されたことを告げている。

(3) こうした世界革命の時代にあつて、帝国主義権力の打倒と国内階級闘争、世界革命闘争を貫徹し、勝利する戦線の配置を、われわれは明らかにしなければならぬであらう。

現に展開され、なおかつ、目的意識的に構築されなければならぬ戦線は、「日本、アジア大陸」「東欧、ソ連を含むヨーロッパ」そして「南北アメリカ大陸」の三つであらう。

アジアにおける革命戦線で問われているのは、一つには、ベトナム解放闘争の質をアジア人民全体に波及させることであり、もう一つは、日本の労働者階級の（帝国主義権力打倒、対米革命闘争の展開を担う）ソヴェト権力を確立することである。前者については、軍事的攻防の中から半ば強制されながらとは言え、カンボジア、ラオスへと波及が開始され、全インドシナの有機的解放戦線として形成されつつある。また、タイをはじめとし、部分的には、遊撃的ゲリラ戦も開始されようとしている。

後者、すなわち、日本における革命的労働者のソヴェト権力II工場占拠、二重権力、帝国主義打倒、国内階級闘争を担うプロレタリア独裁権力は、帝国主義世界支配の中軸であるアメリカ帝国主義の軍事権力を打倒することを不可欠な任務とする。それは何よりも、アジアにお

ける政治的、経済的、軍事的支配に関し、日米帝国主義が特殊な同盟関係を形成していること、そして、アメリカ帝国主義の軍隊が、日本における軍事権力の主要な一部分を代行していることから必然的に、日本の労働者階級自身の帝国主義権力打倒の闘いの一環となる。

だが、それだけではない。日本の組織されたプロレタリア武装勢力の登場は、東北アジアの軍事体制、ブルジョア安全保障体制を根底から崩壊させ、朝鮮半島、台湾における革命闘争の勝利とそれをおして中国の革命派大衆を巨大な戦線の一翼へ結合させうるであらうし、またそれは、東南アジアの革命的農民の解放革命闘争に対する最も強力な援軍となり、その勝利を保障するであらう。

しかも、労働者権力の支配下にある日本の産業力は、武器をはじめとする工業生産物を豊富に作り出す一兵站基地となることができる。

こうした任務は、まさに、日本のプロレタリア権力の国際的任務であり、先進国労働者階級のソヴェト権力と革命的農民のコミューン権力とを具体的に結合させ、アジアの革命闘争を勝利させる道にほかならない。日本の革命的労働者階級は、この任務を貫徹することによってはじめて、かつてロシアの同志が果そうとして果しき

れなかつたプロレタリア世界革命の前衛としての役割を担うことができるであろう。

ヨーロッパにおける革命戦線の構築は、西欧帝国主義国内部における労働者階級のソヴェト運動と、東欧諸国の労働者階級の武装反乱との結合が鍵を握るであろう。その東西ヨーロッパ大陸を貫く戦線の力こそ、N A T Oを軸とするアメリカ—西欧帝国主義の軍事体制を粉砕し対米ヨーロッパ革命戦争の勝利と、ソ連の官僚支配を最終的に解体させ、ソ連労働者階級のソヴェト運動の革命的復活をもたらすに違いない。

南北アメリカ大陸の革命戦線は、現在展開されている都市武装ゲリラ闘争を核とするプロレタリアートの大衆的武装占拠闘争とそれによる大規模な内戦へ発展させることが根本的に問われるであろう。しかし、アメリカ帝国主義の巨大な国家権力の存在からして、おそらくそれは、米帝の世界政策を根本的に破綻させるアジアとヨーロッパの革命戦線の強力な登場と対米革命戦争の勝利的前進の力と結合することが問われるであろう。

われわれは、こうした世界革命におけるプロレタリア日本革命の位置を明確にし、その権力闘争を組織するため、日本階級闘争の現局面を、次に明らかにしなければならぬ。

七〇年の後半は、「不況」の顕在化によって、本格的な資本攻勢が開始され、それとともに、組合主義労働運動の危機が一層深化されている。全産業にわたる合理化攻勢に加え、来春闘をみこした賃金抑制政策が打出されはじめています。そして、全通闘争にみられる民間組合闘争の破産、ゼネ石における急進組合主義運動の破綻というように、総体としての組合主義労働運動の麻痺と破綻が顕実化しつつある。

こうして、街頭「政治」闘争と組合主義労働運動の破産とによって、真のプロレタリア権力闘争の時代がわれわれの手によって幕あけされなければならないことが一層明らかになってきている。

2、日本階級闘争の現局面とわれわれの位置

① 帝国主義支配階級の攻撃の方向

戦後体制の崩壊の開始と帝国主義相互の国際競争戦の激化は、当然のことながら、日本帝国主義に対しても新たな対応を迫ってきた。さらにまた、七〇年に入ってからアメリカ帝国主義の世界政策と国内政策の顕著な転換は、日本の帝国主義ブルジョアジーの対外政策、国内政策に著しい影響を与えつつある。六〇年代にいたり、

B 日本階級闘争の現局面と我々の位置

1、七〇年闘争の特徴

七〇年前半の街頭反政府行動は、その無力化の社会的追認を行なったにすぎなかつた。すでにわれわれは、六九年十一月闘争をもって、七〇年安保闘争の敗北と戦後型街頭政治闘争の破産を明確にした。七〇年六月の街頭行動は、それを再度確認し、さらにそうした行動を結集の軸としてきた新左翼諸派の小ブル的限界を白日の下に暴露した。市民的統一戦線と組織防衛にまわった中核、ブンドはもとより、第二の中核派—新左翼主流派をめざしたM E、青解も、実は、新左翼運動の限界を拡大再生産してみせただけであつた。その結果、六七年以降、社会的潮流として登場してきた新左翼諸派は、第一に、権力の支配秩序の強固な地点では、そのブルジョア的秩序に屈服し、さらにはそれに加担する秩序派へと転落し、第二に、職場においては、街頭政治の裏返しとして、組合主義運動へと逃げこみ、あるいは急進組合主義へと自然発生的に溶解してしまつていく。そして、ごく一部が、京浜安保共闘や赤軍派のように、都市ゲリラ型の闘争を志向して独自の路線をとっている。

ドル・ポンド体制の動揺が深化し、アメリカとE E O相互における輸出競争の激化は、六三年—六五年にわたるE E O諸国の徹底した国内合理化政策の断行とブルジョア執行権力独裁への移行とをもたらした。だが、その後のマルク貨買いの殺倒とドル（ポンド）体制のさらなる破綻は、六八年三月のドル—金兌換の事実上の停止にまで追いこみ、アメリカ帝国主義自身にとってみても、対応が要求されたのである。第二次大戦後のアメリカ帝国主義の動向の基軸は、その圧倒的な世界政策にあつた。それゆえ、アメリカ帝国主義のドル防衛は、何よりも、そうした世界政策のいわば「合理化」でなければならぬ。しかも、ヨーロッパについては、N A T Oによるソ連との軍事的均衡とその上に立った取引きで、少くともこれまでは処理されてきた。だが、アジアについては、先にもみたように、ベトナム革命戦争の永続的展開が米ソの政治軍事体制のワクを實際上突破している。したがって、彼らアメリカ帝国主義にとっては、このアジア政策こそ、「効率よく」再編成することを迫られているのである。そこで彼らは、戦線を維持しながら、ベトナムの周辺を機動力をもってたたく戦略をとり、と同時に日本を東北アジアの安全保障の要とし、またその経済力をアジア全体に投下することを求めはじめたのである。

他方、彼らは、その国内政策についても、経済的ナショナリズムへの転換を急速に推進してきている。それも従来のE.E.O諸国を対象としたものから、次第に、日本の輸出攻勢に対する「保護貿易主義」的傾向となつてきている。最近話題の織維問題をはじめ、電機、自動車から漁業部門にいたるまで広範な輸入制限への動きが、それをはつきりと証明してきているであろう。

このようにして、とくにニクソン政権以後のアメリカは、アジア政策の「合理化」と経済ナショナリズムへの傾斜によって、ドル危機以来の宿命である「世界の覇者」と「ドル（アメリカ経済）の防衛」の両立をはかろうとしているのだ。

これに対して、日本帝国主義も新たな対応を迫られている。まず、その対外政策については、いわゆる安保実質化攻撃として進行しているものである。すなわち、日本帝国主義にとっても、アジア大陸の革命運動からの軍事的防衛と、原材料資源の確保という経済的に死活をかけた課題とによって、まず、アジア後進国に対する経済援助を国家、民間資本の投下によって保障し、また、東北アジアの軍事防衛ラインとして、朝鮮・台湾を結ぶ線を固めている。そして、そのために、沖縄への自衛隊派兵と軍事力の増強につぐ増強をはかっているのである。

と称し、動員してきた国家警察機構を背景に、ロックアップ、戒厳体制によっておしきり、法と秩序の守護神として結集政策をはかろうとしているのだ。

これが、現段階における帝国主義支配階級の基本的動向であり、日本における階級対立は、かつてない規模と深さをもって不断の進行を遂げている。

② 労働者階級の動向

こうした帝国主義の攻撃に対応した労働者階級の動向は、殆ど我々がその全容を掌握し得ない広がりをもった即自的「反抗」として動きはじめている。自然発生的な個人、グループによるサボタージュや命令無視などの行動が、それに他ならない。

それをもう一步たち入って検討してみよう。まず、久しく、労働運動不毛の地と称せられてきた民間大企業においても、注目すべき事態がはじまりつつある。民間大企業の場合、本工は、厳しい労務管理と御用組合の支配におかれています。他方、労働力のかんりの部分は、下請、社外工や、臨時工に依存し、彼らは、苛酷な労働条件の下でポロポロに酷使され、使いすてられています。

そして、特に若年労働者は、転業が著しく、雇用関係が流動化しているために、逆に、「温情」主義的な企業意識は薄く、即自的「反抗」も激しい。また、全体的に組

次に、日本帝国主義支配階級は、その国内政策についても重大な時点に立っている。

第一に、経済政策上では、周知の如く現在、新たな「不況」に直面している。今回の不況の特徴は、①これまでの日本資本主義の産業的発展を主導してきた戦略産業である自動車、電機、鉄鋼が軒をみに不況に陥っていること、②その原因は、それらの国内需要の停滞と、対米輸出の頭打ちによること、③また、従来から企業の金利負担の軽減を果してきた膨大な額に上つてきた財政支出が、国鉄、食糧、健保等の赤字をはじめとする固定的支出の自然増のため「硬直化」し、ますますふくれ上つていること、などである。こうした事態は、いわゆる「不況下のインフレーション」として、日本も又ヨーロッパ型の破局へ一歩近づきつつあることを示している。

ここから、帝国主義支配階級は、全産業に対する徹底した合理化攻撃（この中には、国鉄など公共企業体も含まれる）と、二月一〇日の佐藤演説（経団連評議会）にみられるような所得政策、賃金抑制攻撃、さらには、国家財政のふるいわけによる切り捨て政策に、うって出ようとしている。

そして、第二に、こうした攻撃を「七〇年安保対策」

合主義的労働運動の基盤が弱いがゆえに、そこから解放された行動へと向う傾向を孕んでいる。華々しい戦線統一の底流では、こうした傾向が脈うっているのだ。

また、公労協部門では、今回の全通闘争にあらわされているように、合理化計画の進行と労働強化の攻撃にさらされ、下部労働者の抵抗と、民間・組合官僚との亀裂は、ますます深まっている。全通労働者の場合、機械導入、監視労働、戸番制配達導入などの締めつけが急速に強化され、日常的に職場で、主任、主事のつるし上げ、小規模な反乱がくり返されている。そして、組合は、上部が宝樹派の右翼組合主義者が、下部官僚は、協会派、日共の「左」翼組合主義者が牛耳り、組合的フラクにおける官僚内部の相互対立をかさねつつ、総体として、闘争全体の発展を阻んでいる。

こうして、組合官僚は、下からの反乱と省からの攻撃のはさみうちにあつて、危機に陥り、次第に二組（全郵政）からの防衛に走っている。

このような全通の現状は、実は明日の総評公労協大単産の全体として辿る道に他ならない。国鉄も、たしかに現時点では、組合指導部が岩井派で、「左」翼組合主義者によって占められているし、一応、組合的結束力をそなえに保持してきたが、国鉄当局が、財政合理化の矢

面に立たされ、一五万人合理化計画として改めて練り上げられた攻撃を加えようとしており、来春闘以降の賃金抑制攻撃も加わって、本格的に組合主義運動の危機に追い込まれるであろうことは間違いない。中小企業労働者の場合、現在進行中の「不況」によって深刻な影響を受けようとしている。大企業、独占体の系列下からはじき出されたり、或いは、その犠牲のしわよせを受けて、中小零細企業の倒産が相次いでいる。したがって、そこに働く労働者の労働条件は、ますます悪化しつつある。

以上みてきたように、日本における労働者階級の現状は、職場の末端における個別的な「反抗」と、自然発生的な職場反乱へのエネルギーを深部から蓄積し、組合主義的労働運動の破綻の進行とあいまって、工場占拠、プロレタリア権力闘争の基礎条件を培おうとしている。

③ 政治配置と我々の任務

こうした帝国主義支配階級の攻撃と労働者階級の現状の中において、我々の位置を明らかにするために、現在の政治配置を簡単に確認しておきたい。

第一に、社共をはじめとする既成指導部は全面的な議会カンパニア路線にひたっている。来春の都知事選、統一地方選と参院選挙を焦点とする既成指導部内部の種々なかけひきが彼らの「政治」の主要関心事となっており

ますます、労働者階級の実体とかけはなれ、浮上った存在となつていく。

第二に、新左翼諸派は、労働戦線においては、明らかに、組合内反対派路線か、または（目標としての）少数急進主義組合路線をとっている。たとえば、反戦派の主流革新共同中核派は、「全造船石川島分会の教訓」と題する論文（「前進」一二／一四号）において、同盟支配に抗して、全造船、石川島分会を存続させることを、「反戦派が決起して開始し、社会党が合流して完成した」と自賛し、これを「日本労働運動の具体的成果の実現である」と評価している。ここには、組合防衛ど、社民との統一戦線と云う新左翼労働運動の路線が見事に浮き出されているであろう。また、九月のゼネ石精闘争における反戦派の役割（基幹産業労働者の任務）も、少数ではあれ、急進組合主義の指導部として確立することに規定している。

こうして彼らは、資本の攻撃と職場反乱の開始とによって、崩壊を開始している組合主義労働運動にしがみつき、組合官僚の一部と癒着して自己の組合における地位を求めて、その補完物への転落の道をまっしぐらに進んでいるのである。

我々は、こうした配置の中で、「左」右の組合主義運

動の破綻を促進させ、その死を宣告し、プロレタリア階級の革命的エネルギーを解放しなければならぬ。

現在の日本における階級闘争の局面は、いわば、「六八年前」のフランス状況に立ち入っていると云えるであろう。我々は、今こそ、職場の反抗を「発見」し「組織」し、遊撃的な職場反乱として、その深化、拡大をはかり工場占拠闘争——プロレタリア権力闘争を現実を開始しようではないか。

そして、工場占拠ゼネストの戦線配置をかちとり、二重権力、武装蜂起、帝国主義権力打倒、プロレタリア権力樹立の革命闘争へと、たゆまず前進しようではないか。それによって、日本の革命的労働者階級を対米革命戦争と世界革命の前衛として登場させようではないか。

われわれは「五月のフランス」を突破しなければならぬ。

全ての闘争を工場占拠闘争へ！
破産せる「戦後型」階級闘争と、それにしがみつく部分（社共・
革マル・八（九派）を左から解体し、武装行動委運動を軸に革命
的権力闘争を大たんて展開せよ！

(1) 叛乱のほう火を更に拡大せよ！

同志・兄弟たち！

現下の日本階級闘争は、大いなる陣痛の苦しみの真只中にある。それは、二大潮流の極端と対立を通して、一大歴史的転換点を生み出しつつある。

一方の部分は、戦後革命の挫折以来、一貫して体制内に逃げ込み、戦後妥協体制の政治構造の枠内で、一切を「取り引き」的に処理しようとしてきた、社共を筆頭とする反政府・政策阻止闘争派であり、いわゆる新左翼（八（九派、革マル等）は、その街頭実力派として一定に急進的なるまい、「政策阻止闘争派」の重大な補完物として自らを形成してきた。

革命的権力闘争を推進させることなぞ、およそ夢ものごとであり、日本階級闘争の「血の認識」として獲得していったことは、日本階級闘争の一方の潮流として存在しようとする者達にとって、当然すぎる、むしろ遅すぎることであった。

兄弟たち！日本階級闘争の生みの苦しみは、現在までの我々の、英雄的な、しかし困難な闘いとして表出している。明学大・東海大・法政大・立正大等々における烈火の闘いの展開は、ブルジョア国家権力、及び自称「左翼」を含むその秩序の友をしん憾せしめ、それらの闘争は、新左翼とは全く異質のものとして怖れられた。

「計画された戦術」と、それを担い切る組織性が、遊撃戦と群衆戦の組織的結合として結実し、学園人民戦争の爆発となって火をふいた。

だが、かかる叛乱闘争は、社会総体の規模からみればいまだ部分的なものでしかないであろう。六八（六九年一月）に決起した多くの全共闘叛乱大衆は霧散し、左翼叛乱戦線は基本的に解体した。しかも「全国全共闘連合」と称する八（九派のキャンピニアスケジュール遂行の為の党派間ボス交機関による無気力な「闘争」の悪無限的展開は、尚一層、その拡散に拍車をかけている。

同志・兄弟たち！我々は一刻も早く「全国全共闘連

（文責 石井 創）

だが、七〇年安保をめぐる階級闘争の全過程は、かかる反政府キャンピニア潮流を、その極端物として孕みながらも、我々が何度も確認してきたように、その全展開過程の中に、（自然発生的）全共闘運動に見られる如く、それを乗り越える革命的質の「萌芽」を生み出してきたのだ。それは、もはや反戦・反安保・反帝国主義政策の政策阻止・反政府闘争にとどまるものでなく、工場占拠・二重権力・武装蜂起へと高められる以外には自らの反乱を貫徹できぬものとしてある。

同志・兄弟たち！我々を先頭とする革命的権力闘争派が、七〇年安保闘争の全過程を総括する中から、革マル・八派を先頭とする「実力」キャンピニアの政策阻止スケジュール闘争派との根底的、非和解的対決を経ずして

「合」を真に叛乱戦線を担うものとして解体し再編しつくさねばならない。それは、自然発生的全共闘運動をのりこえた地平に、革命的全共闘運動の大展開を基礎として構築されねばならない。全国反戦は、職場叛乱（工場占拠を担うものとして解体し再編されねばならない。諸々の統一戦線は、革命運動の利益にかけて、工場占拠闘争を担い切るものとして再編して行くことが問われているだろう。

兄弟たち！「おしゃべり左翼」たちは、相も変わらず「口先きの前衛」として存在しようとしている。我々はこの間学園、地区において、支配階級・右翼をしん憾せしめ、同時に、新左翼諸派との激烈な内部階級闘争の二正面作戦を闘い抜いてきた。中核派・プロ軍等は、我々によって東海大・法政大・立正大・明学大等々においてその小ブル秩序派の本質を満天下にさらされ、ゲバルトを怖れ逃げまわっている。我々は革命派の独裁・制圧を更に拡大し貫徹していくであろう。そしてその為に共武行を軸とする戦闘体制を更に強化しようではないか！
党（共産主義武行委）大衆行動委の主体的推進構造を更に強化し、工場占拠（二重権力）武装蜂起の陣型を、強固な実践を踏まえて構築していこう！

②日帝の人民抑圧攻撃と、日本階級闘争の現局面

(a) 戦後世界体制の深まりゆく崩壊の危機
戦後世界体制の根底的動揺・崩壊は、ますます激化しつつある。

すなわち、①イギリスの労使関係法をめぐる五〇万のストライキから、賃上げをめぐる電力ストの一大展開、及びイタリアの再三のゼネスト、地域暴動による中道左派政権崩壊の危機、これを基軸としつつ、ヨーロッパ状勢はブルジョア権力の危機を促進している。しかも、マルク買付けはなお進行し、米帝国主義のドル防衛・保護貿易政策と相まって、ポンドへの圧力は一層深刻さを増している。さらに、仏「ドゴールなきドゴール体制」ボンビドー政権による革命勢力の非法化、スペインにおけるフランコ独裁政権による実質上の非常事態法の発動。このような形をとって、革命と反革命の衝突は進行している。

②そして、五六年ハンガリア・ブタベスト叛乱、ポーランド・ポストン叛乱から六八年チエコ事件を経て、またもや、東欧における労働者・市民の叛乱は、ポーランドにおいて、以前は「自由化の旗手」としてあったゴムルカ政権を根底から揺さぶっている。

ろう。

これら先進帝国主義国における労働者・学生叛乱と後進国における解放革命戦争・東欧の労働者・市民叛乱は六八年三月のドル金の実質上の兌換停止をもって始まった戦後世界体制の経済的危機の深化に拍車をかけ、六八年五月、フランスにみられる帝国主義世界体制の政治危機を全世界的な規模のものとして展開しつつあり、戦後世界体制の構造そのものの崩壊の危機として、各国権力危機へと進行していくであろう。

(b) 戦後世界体制の崩壊の危機の中の日本帝国主義
こういつた、戦後世界体制の経済的・政治的危機の深まりゆく中で、わが日本帝国主義の動向は如何なるものであろうか。詳細は、第三報告を参照してもらいたい。その基本的な動向は以下の如くである。

①一〇・十一月を頂点とした七〇年安保階級闘争を押え込んだブルジョアジー・支配階級は、日米共同声明の内幕によって表明される如く、朝鮮半島、台湾、ベトナム等の極東の「緊張状態」を米帝と共同「確認」し、日米安保体制・アジア安保体制の強化による、その共同防衛の義務を負い、七二年「沖繩返還」策動を展開している。
②これらの対外・国内政策の意味するところは、アジア革命運動に対決する日米反革命同盟の強化であり、入管

③アジアに於ては、ベトナム革命戦争のインドシナ革命戦争への発展を基軸としつつ、ベトナムに於る農村コミューン革命と都市ゲリラ闘争との結合が促進されている。カンボジアにおいても、「第二のベトナム戦争」へと突き進み、内戦は激化している。パキスタンでは、反軍部勢力(アフミ連盟)の伸長がいちぢるしく、軍部による右翼クーデターの危機が招来されんとしている。インドでは、ナクサライトを先頭とする、地主階級に対するセメント戦を通して、土地革命を展望する勢力が台頭している。これらの、アジアにおける「革命と反革命」の衝突は、基本的には、米軍の北爆再開どう喝と、それに対する北ヴェトナムの総動員令の発動を軸としつつ、全インドシナ規模での革命戦争の戦線を形成しつつある。そして、ティン、ビエン、フーへの北爆は再開された。

④北米大陸におけるカナダFLQ、合衆国のウェザーマン・パンサー・無数の都市ゲリラグループによる武装闘争、テロ攻勢。中南米ゲリラ戦争、都市ゲリラの攻撃は米帝を足下からゆるがし、ベトナム・インドシナ革命戦争とともに、米帝国主義を揺さぶりつつけている。

⑤中近東においても、ゲリラと民族ブルジョアジーの「密月」は終えんししつつあり、ゲリラの社会主義化が促進している。ヨルダン内戦は、それを象徴的に示したであ

問題にみられる如く、アジアの解放革命戦争に対する露骨なる敵対の強化と、民族主義・排外主義イデオロギー攻勢である。この中における日帝の位置は、独自の通貨圏をもち得ない等の条件から、基本的にはドルブロックに徹底的に依拠しながらも、相対的地位を一段と引きあげ、急速に軍事的な面をもちつつある。

これらは、三次防から沖繩「返還」・自衛隊派兵を軸とした四次防計画にみられるし、関釜フェリーの開通による韓国に対する「支援」の準備とデモンストレーションとして表われている。

④日米共同声明・年末総選挙と進んだブルジョア支配階級の政治プログラムは、社民の大敗と保守反動の勝利となった。この背景にあるのは、日帝の高度成長政策の破綻以降の、合理化、財政収奪を中心とした政府・資本の攻撃のもたらした諸矛盾(インフレ・生活環境の悪化破壊(公害等)、職場に於る資本家支配秩序の強化など)とそれに対する野党勢力の無力化が議会政治への根本不信を生み出したことにあり、ブルジョアジーは執行権力独裁の強化をもってそれに対決し、治安警察機構の末端までの強化を遂しとげ、それを基礎に「秩序か混乱か」のどう喝をもってのりきったことを意味する。

⑤だが、これらは①マルク切上げによる国際通貨体制の

小康状態と、ベトナム軍拡ブーム輸出伸長にさせられた一時的、相対的安定にすぎないし、①一〇、十一月「勝利」からアジア進出をもくろむことは、ドル依存の強化と国内矛盾の激成とならざるをえない。

⑥以上を集約的に検討し、日帝の動向を見ていこう。

それは、一言で云うならば、資本の露骨な攻勢によって、合理化、労働強化、職場支配秩序の強化と、賃金抑制を貫徹し、激化する国際貿易―通貨、ダンピング戦争に勝ち抜いていこうとするであろう。しかも、不況のきざしは、すでに在庫の圧倒の増加―自動車、電機、センイ産業の減産、大企業の減益等となってあらわれている。米帝のドル防衛―保護貿易政策は、日帝の生存条件を、より一層の国内再編を不可欠のものとして強要する。戦後帝国主義世界体制を支えていた米帝国主義のドル散布―万年赤字収支は引き締められ、日本においても、戦後妥協体制「取り引き政治」を支えていた賃金上昇を基軸とする体制内的闘争の物質的条件は、音をたてて崩れつつある。

⑦かかる状況の中で、政府資本による、むき出しの攻撃は、既成の野党・左翼・労働組合による「反対闘争」―取り引き闘争を、決定的に無力なものとして大衆の目にも映じさせ、総評・民同は下部労働者のつきあげに直面

火の展開をかちとらなければならない。

ソヴェト―プロレタリア権力独裁へ、工場占拠闘争へ一切の障害物を粉砕し、進撃しようではないか！ 全ての工場・学園にプロレタリア反乱の赤き烽火をかがげよ！

③職場叛乱・工場占拠へ！

労学武装行動委運動をもつて日帝の合理化・労働強化・職制支配秩序の強化を粉砕し、職場叛乱・工場占拠へ攻め上れ！

(a) 我々の立脚すべき地平

①現下の階級情勢が、およそ以上のようなものであるならば、我々の為すべき事は明確である。ソヴェト運動―プロレタリア権力構築の闘いを押し進め、「権力による権力の打倒」の闘いへ、即ち、工場占拠―二重権力―武装蜂起―世界革命戦争の戦略的課題を表現する事がそれである。

すでに、ゼネ石精闘争の教訓、都職労における反民間闘争は、われわれに工場占拠の課題を、地区共闘―地区労学行動委の建設と、それを通して職場叛乱の組織化を突破口として、実践的に開始しなければならぬし、又その客観的な条件も成熟の一途をたどっていることを告げしらせた。

している。「全通問題」は、全総評の共通にかかえ込んでいる問題として全面化せざるをえないし、職制支配秩序の徹底的強化による合理化・労働強化は職場にほろ大な叛乱のエネルギーを蓄積している。ブルジョアジーは盛んに「不当な賃金上昇」キャンペーンを流し、物価高インフレを維持しつつ、賃金抑制を企てている。さらにブルジョア財政政策の破綻を、官公労の合理化・労働強化―職制支配秩序の強化へとしわ寄せしている。

⑧「七〇年」を、ともかく乗り切った日本帝国主義は、かかる合理化・労働強化・職場支配秩序の強化の全社会的遂行を戦略的な選として、一切の矛盾を労働者・人民大衆に転嫁し、国際通貨―貿易戦争に生き残りんとしている。そして、労働力商品の養成機関であり、又、大衆収奪機構である学園においても、更なる学費値上げ攻撃を開始している。

⑨以上の帝国主義による攻撃は、日本における革命派の主体的力量の弱さを最大の条件として急ピッチな展開をみている。

同志・兄弟たち！

全世界に於て展開されている激烈な闘いの現状は、我々に決定的な飛躍を要求している！ 我々は日本カンパニア新左翼・社民・日共を解体し、革命的権力闘争の烈

我々の追求しなければならない事は、新左翼の如く帝国主義の個々の政策に関して、スケジュール的・のりうつりの対応し、「安保決戦がすんだから次は〇〇だ……」というような事では断じてなく、帝国主義本国に於る革命の根本問題、工場占拠・二重権力・武装蜂起を真正面から現実遂行していくことなのである。

かかる戦略的認識を踏まえて、我々はすみやかに自己点検・組織点検を再遂行し、世界を、日本を焼き尽す革命戦争の業火を巻き起こさねばならない。

⑩我々は、その為に必要な一切の組織的・物質的準備を恒常的・永続的な体制として自らの胎内に孕みつつづける必要がある。綱領論争のより一層の深化と、そして戦略―戦術の実践に基いて獲得された、この間の組織的成果を、より全体的なものとして、その質の拡大・深化を克ち取る事が急務とされている。

我々の「計画された戦術」と「それを担いきる組織」の思考―行動様式（とりわけ、遊撃戦の諸問題と群衆戦―大衆叛乱の組織化についての実践的到達点）は、軍事論の分野においても、カンパニア左翼とは決定的に異った高次な位相へと自らを定立させてきた。「わが軍旗は闘えは必ず勝つ軍旗である」この遊撃戦―人民戦争の命題は、我々の個々の戦闘に、「計画された戦術」の組織

的実践としていかんなく發揮されてきた。戦後妥協体制下の「政治闘争」にその出生の秘密をもつカンパニア新左翼たちの政治―軍事の二元的思考―行動様式は、我々にとっては無縁のものとなりつつあり、ソヴェト革命の戦略に規定された「武装行動委運動」としての政治・軍事の把握は、新左翼には想像もつかない「軍事」の実践と提起としてたちあらわれ、一切の秩序派を恐怖させてきた。

同志・兄弟たち！

この間の革命派全共闘運動の展開と、それを通じた組織建設・すなわち党―共産主義武装行動委―大衆行動委の形成は、我々の「狂気の実践」として新左翼カンパニア主義者の怖れを引き起した。戦後妥協体制―平和と民主主義―に骨のずいまで浸りきつた者達に、我々の闘いの「評価」すら定まらないのは当然である。われわれに對する「挑発分子・権力に泳がされ中核派つぶしの先兵になつてゐる」(「中核」)、「入管デモをやらぬ社会排外主義」だとかいふ、低次元のロゲンカに應ずる気はさらさらない。右翼とのセンメツ戦を日和りつつづけている輩の泣き声に、耳を貸す必要すらない。考えてもみたまえ！ 右翼の前から逃亡をつづけ、妥協し、ロックアウトに屈服し、大学当局になれあい、何が「在日アジア

実践的諸問題を検討していこう。

①日本帝国主義の合理化攻撃

六三年に、主として重工業を中心に合理化の嵐が吹きあれたが、それは今や、全産業に渡っており、来るべき不況をのりきり、国際貿易―通貨・ダンピング戦に克ち抜く為の、日帝の死活をかけた問題としてある。重工業における若年労働者の職場定着率の「異常な低さ」は、資本の攻撃の狂暴さを示して余りあるだろう。拒否できない残業、残業と二交代三交代勤務をしなければ食っていけない低賃金、職制の監視、強圧的職場支配等は、いまや全ての職場の「日常」となり、組合はこれに對して決定的に無力であるばかりでなく、支配秩序の先兵となつてゐるものも少なくない。

これらの状況が、若年労働者をして「転職」という反抗形態を取らせてきた主な原因だが、今や、転職しても何の変化もないことは誰の目にも明らかである。

更に、支配階級、ブルジョアジーは、財政政策の硬直化、手詰りから、官公労における合理化攻撃をますます促進してゐる。一〇、十一月闘争後のレッドパーシ攻撃は、その布石であつた。

帝国主義ブルジョアジーは、その合理化攻撃の遂行のために、一切の手段を選ばず、反対する部分に對する職

人と連帯する立場に立て！」だ！ 語の眞の意味で、カンパニア主義者たちは鉄面皮である。

③兄弟たち！ われわれは、自然発生的全共闘運動の血のじむ敗北を、痛烈な自己批判をとおして受けとり、革命的全共闘運動の永続的実践として、自らその先頭に立ち闘つてきた。我々は、かかる闘いを、全社会的な規模へ、とりわけ労働戦線への大規模な拡大・波及として即時に展開しなければならぬ。街頭カンパニア「反戦」の総体としての過渡性は、いまや桎梏物にさえなりはじめてゐる。労働者行動委運動の展開こそ急務であり、全ての心血を注ぎ込んで、資本の攻撃を粉碎する職場における反乱と、その主体的推進の環―労働武装行動委運動を強固に構築することが問われている。

更なる進撃を開始しようではないか！

(b) 合理化・労働強化・職制支配秩序の強化を職場反乱・工場占拠で粉碎せよ！

労働者行動委を組織し、職場アウシュヴィッツ体制を粉碎せよ！

同志・兄弟たち！ 我々の立脚すべき地点が以上の如くであり、ソヴェト運動の展開によって、日本帝国主義の死活をかけた合理化、労働強化攻撃を粉碎することこそが、火急の任務として問われている。以下その為の

場からの暴力追放・右翼ガードマンの導入によるロックアウトIIアウシュヴィッツ体制の強行を行っている。

②既成労働運動の無力化

かかる政府・資本による狂暴な合理化・労働強化・職制支配秩序の強化の攻撃に對して、組合の無力な対応、既成労働運動の破産は明白である。全通・宝樹体制に對する大衆の叛乱は、全通中央委が「妥結」したはずの年末闘争を、多くの支部がなおも、超過勤務拒否闘争として闘う、という形をとつてゐる。東京では、七四支部中四四支部が現在までのところ「妥結」協定を結ばず、なおも闘つてゐる。(二二/二二現在)

民同右派、宝樹官僚に對する大衆の自然発生的反乱といひ、民同の危機を象徴する「全通」問題は、全ての労働組合組織の抱え込んでいる矛盾の氷山の一角にすぎない。総評・民同・組合官僚は、政府・資本と、大衆の手によって追い込まれてゐる。

一方、民同・同盟を中心に画策されてゐる「労働戦線の右翼的統一、再編」は政府・資本の攻撃に何ら反撃するものではなく、むしろ積極的に政府・資本の配下に組み込まれんとする秩序の友の反労働者的な自己保身の対応であり、帝国主義的労働運動の最たるものである。

戦後妥協体制が崩壊を開始し、自らの存在基盤たる「

取り引き闘争」の条件が消えつつあるとき、ブルジョア支配秩序の友、組合官僚は、更なる右旋回を遂げていくであろう。彼らは、革命的労働者・学生の叛乱の過程で粉々にうち砕かれるであろう。それが彼らの運命である。

③「左翼」組合主義、「反戦」との闘い

だが、こういった既成労働運動の破産に対して、左翼組合主義・赤色組合主義をもって労働運動のヘゲモニーを握ろうとする日共や新左翼の試みも又、組合官僚と同様にみじめなものである。

表現は多少違っても、新左翼は「戦闘的第三組合運動」の必要性を訴えている。がその実践的帰結は、民同の左からの補完物を意味するにすぎず、戦後体制の崩壊の中で、二度目の喜劇を演ずるといふ無惨な結果を生むであろう。

その事は、工場の大衆的占拠闘争の巨大な可能性を示したゼネ石闘争に対する対応をみればわかるであろう。青婦部に一定の影響をもつ中核派は、結局のところ、この闘いに対応できず、青婦部における囲い込みをはかる以外何らなし得ずして、「ケルン・細胞づくり」と「第一組合の強化・戦闘的第三組合運動を」とを叫ぶ程度であった。民青と違ふところは、「反スタ」をわめいてゐるところだけである。

資本の狂暴な右からの「取り引き」破壊、屈服強要に對して、労働組合運動は、決定的に無力であるばかりでなく、有効な反撃を組織する上での重大な障害物となっているのだ。

それゆえ、為すべき事のまず第一は、反乱労働者を行働委に組織し、ブルジョア的、組合的制約から自由な結合を獲得し、行働委による独裁を、職制・組合に対して貫徹すること、第二に、処分攻撃に対して、組合「一票投票」ストライキでなく、行働委・闘争委による反乱型ストライキ↓占拠闘争をもって反撃し、一切の秩序派に對する革命独裁を敷くこと、その為に武装すること、であり、第三に、かかる質をもった労学共闘、地区共闘の創出による占拠闘争の拡大、波及であり、第四に、資本のロックアウト→アウシュヴィッツ体制に対する粉砕闘争の連続的貫徹をとおして大衆反乱を組織すること、これである。

我々は、プロレタリア階級闘争の発展の障害物となっている組合主義者との対決・粉砕と、組合にしがみついている秩序派・新左翼の粉砕・解体、そして労学行働委運動による革命的権力闘争の断固たる推進こそが、現下の日本階級闘争が切実に要求しているところのものだとすることを知らねばならぬ。

新左翼諸派も、「帝国主義労働運動に對決する新しい労働組合運動を」（青解）或いは「あらかじめ分裂をのりこえて闘う戦闘的第三組合運動」（共労）等、大同小異である。会社側の八項目攻撃の前に敗北したが、「不当解雇白紙撤回、安全要求、加鉛ガソリン追放」のスロガンを掲げたゼネ石闘争が鋭く突き出したものは、労働組合運動そのものの本質的限界と、そしてそれに無自覚な左翼組合主義者の破産、これである。では、ゼネ石闘争に何が問われていたか。

ゼネ石闘争の特質、そしてその普遍性は、①資本の攻撃（合理化・労働強化・労働者の安全の犠牲・処分弾圧攻撃）の非妥協性であり、②職場の労働者大衆自身による職制のつるしあげ、追放と、それによる中間・下部職制の全面的なマヒをとおした大衆による職場の制圧・管理への進展、③かかる叛乱に對する処分・首切り攻撃と国家権力・右翼暴力団と一体化したロックアウト→アウシュヴィッツ攻撃、④そして、それに対する組合主義の屈服・組合官僚共の上からの屈服強要、これらである。すなわち、資本の非妥協的合理化、労働強化、処分弾圧攻撃と、これに對する職制との闘いを通じた職場労働者大衆の反乱、そしてこれにまつわりつく組合主義、ここに一切の問題の本質が内包されている。

④労学武装行働委運動を強固に推進せよ！

現下の階級闘争の要請にこたえて、我々は全ての心血を注ぎこんで労学武装行働委運動の展開を推進しなければならぬ。政府・資本の狂暴な攻撃を、プロレタリア反乱をもって紛みじんに打ち砕かねばならぬ。開始された生産過程における両階級の真正面からの激突を、我々の武装行働委運動による先制攻撃によって攻勢的に展開し抜き、帝国主義の死活をかけた攻撃を粉砕し、プロレタリア権力独裁へと攻め上ろうではないか！

——職場における行働委運動の当面する戦術は何か——
①職場の現状と労働者行働委運動

すでにみてきたように、日帝の合理化攻撃は、妥協を許さない徹底的なものである。しかも、大衆収奪（公共料金——物価の上昇）と相まった合理化、労働強化、監視労働、という抑圧攻撃のすさまじさは、全ての職場に労働者大衆の不满をうっ積させている。最近では、どこかの職場もそういう状況であることを労働者は知っているし、もはや、居直って闘うか、奴隷の屈服か、二つに一つしかないこともしっている。

このことは、あらゆる職場での、職制支配の反革命的強化に對する日常的反抗、サポーターシュなどの形をとって噴出してゐる。

しかも、組合官僚は、無力な組合運動を上から押しつけ、従わない場合には「統制処分」でどう喝し強迫してくる。秩序派の大親分であり、マッシーポンブの茶番劇以外に能のない連中である。

更に、一見、威勢の良い事をいう「新左翼」とかも、職場では意気地のない事がほとんどだ。資本から弾圧をくらうと、それまで「左からつきあげて」いたはずの民衆の御加護を、ひたすらに願ひあるく弱腰ぶりを見せたりする。いずれにせよ、学生自治会の如く、組合の機関掌握を夢見ている、骨の髄までの組合主義者ではない。こういつた、吹き荒れる合理化、労働強化、職制支配秩序の強化の嵐と、その前に展開されている新旧左翼入り乱れた天混乱こそ、行動委運動を不可欠のものとす地底からの認識であり、現実的展開の最大保障である。

我々はまずもって、日常的に噴出している不満の情念を、反抗・叛逆へと、不断に掘り起し、煽動することに努力しなければならぬ。

それをブツつける対象は、一切のブルジョア秩序と、それを担うもの達であり、とりわけ、職制。組合官僚がやり玉にあげられる。合法、非合法を駆使した不断の職制。組合官僚の追求、孤立化、つるし上げを行なうから、秩序を流動化させ、行動委運動の展開を準備し、組

得ないのではないか、とさえ考える。

というのは、左翼反対派戦術——現実的には組合内左翼つき上げ反対派として一定の力量を構築したとしてもその形成の論理——内実が、そもそも資本の政策に対する一般的反対と、それをネグレクトし、歪曲し、妥協、取り引きへずれこむ組合ダラ幹に対する「つき上げ」すなわち、戦術のより一層の戦闘化・徹底的な民主主義的要求の突きつけ、総じて「戦闘的、民主的」階級論理の主張にとどまらざるをえず、自ら大衆の前に展開してきた「論理」に拘束されるのである。このような形成の基点となった「論理」と、現実に行動委に要求される職制・組合官僚粉砕、「反戦」解体の革命独裁の貫徹をおとした反乱闘争の運動展開とのギャップは深すぎるのである。

それ故、反対派戦術の最大限の駆使↓その無力性の徹底認識↓行動委の必要性、結成↓運動展開、という戦術パターンで進み得たとしても、やはり戦後妥協体制下の政治構造からの脱却が不十分にすぎるのであり、革命的権力闘争を担いうる組織実体は不十分な中間的な形成としてしかなし得ず、運動の展開の過程で、痛烈な自己純化の作業が厳しく要求される。

他方、我々が「日常的反抗を掘り起し、不断にそれを

織していくのである。ふつう、極めて少数から始まる行動委運動建設の作業は、支配階級の側のありとあらゆるスキと弱みに「つけ込み」食ひ下がることを、創意工夫をこらして追求することから開始されるであろう。組織者は、又、大いなる煽動家であらねばならない。

③行動委建設ノ 職場流動制圧——反乱型「ストライキ」へ！

1、日常的反抗・即自的叛逆を不断に掘りおこす中から、我々は直ちに、行動委の結成へ進まねばならない。だが、ここで確認しておかねばならないのは、我々が日常的反抗を掘りおこし、それを通じて運動組織体を形成していくという場合、以前に我々の一般的確認としてあったと思われる「反対派戦術の最大限の行使」から「行動委運動へ」という戦術についての問題である。

我々は、かかる形態での「左翼反対派から（始めて）行動委運動へ（昇りつめる）」という戦術形態は、一般化され得るものではないし、ましてや教条化されるべきものではない、といわざるを得ない。

更にいうならば、かかる戦術展開で行動委運動を展望することは、行動委そのものに種々のブルジョア的制約を色濃く残しつつ、その発展の阻害要因を内包した、極めて不十分な、中間的な「行動委」運動にならざるを

反乱へ組織し、高める」といふとき、その結合の質は、当初から戦後体制内の政治の構造をとり扱ったものとして追求されることが可能であると考える。それは、当初から一切の組合的集約を拒否するものとして展開されねばならない。あらゆる手段を駆使して不満の炎を噴出させ、それに「火」をつけてまわり、流動化を促す。かかる中で、反乱部分を地下的に結集する。当初から独自の結集され、独自の連絡網、情報網、独自の財政機構、独自の武装方法をもったものとして形成されていくことが追求されうるであろう。そして、以降の流動制圧反乱型「ストライキ」、占拠闘争、さらにロックアウト、アウシュヴィッツ体制を粉砕する連続的遊撃戦の貫徹とそれをもつてする群衆戦との結合という激烈な課題を担い切る組織の内実には、より接近し、それを獲得していくことを可能とするであろう。

2、さて、行動委の一応の結成を克ちとりつつ、我々は更に日常的反抗を掘り起し、それを職制・社民等におつつけ、行動委——大衆による職場の流動的制圧にのりださなければならぬ。流動制圧とは即ち、秩序の友に對する内部階級闘争と、ブルジョア秩序に對する粉砕闘争の徹底的な遂行であり、とりわけ職場における資本家の先兵職制。組合官僚に對する攻撃・粉砕・無力化を

とおして、職場秩序のマヒ、新たな「闘いの秩序」を創出することである。新左翼組合主義者も、徹底的な分解を加え、解体へと追いつめねばならない。

流動制旺戦の展開は、更なる流動化を巻き起こす。

それは、大衆の一定の階級分解と、諸々の政治勢力の階級の本質の暴露と、それにふさわしい対応であり、資本の処分弾圧攻撃を始めとする「圧殺策動」である。

3、職場流動制旺戦の貫徹によって巻き起こされた流動化は、その階級の本質を露わにした方向性を示しだす。すなわち、資本は、より一層の職場の職制支配秩序の強化と、処分弾圧・レッドパージ攻勢の強化をもって挑んでくるであろう。

又、組合官僚は恐怖し、当初の「統制処分」をもってするどい喝の対応も、大衆の流動化が激しいとき逆に、上からのストライキ、すなわち、組合による一票投票ストライキのおっかぶせを企ててくるのが予想される。それによって、大衆を自己のヘゲモニーによって集約し、最終的には、再度の投票決議と、ボス交によって、反乱の抑え込みを完成せんとしていくであろう。

新左翼組合主義者は、これに若干の「戦闘性」と「左翼的」なスローガンを附与することに腐心し、官僚粉砕／＼など及びもつかない。

国家権力の準治安軍機動隊による占拠破壊。ロックアウトと右翼暴力団・ガードマンによるアウシュヴィッツ体制を敷いた上での、生産再開——屈服強要攻撃である。われわれは、これに対して、行動委の非合法活動体制を一層強化し、地区反乱・地区人民戦争を着実に準備しなければならぬ。

そして、敵の体制の弱点や行動様式の把握とおして共産主義武装行動委を先頭とする武装した労学行動委による遊撃戦の連続的展開によって敵のガードマン傭兵体制を粉砕し、群衆戦との結合をかちとり、敵をドロ沼に引きずりこんでいくのだ。

われわれのヘゲモニーをもってするところの、遊撃戦の自在な連続的貫徹によって、敵の傭兵を分断し、撃破し、その士気を衰えさせ、恐怖のドン底にたたき込み、さらに、有事出動の機動隊に対しても、より高次の質の攻撃を遂行していくであろう。

計画から撤退までをワンセットとした遊撃戦の戦闘様式の、より一層の確立をもって、人民戦争戦術を深化させていかねばならない。

わが共産主義武装行動委の、各学園における遊撃戦の展開と、東海大反乱にみられた遊撃戦の貫徹による大衆反乱の爆発・大衆暴動という成果は、全ての行動委の教

かかる状況にあるとき、為すべき事は何か。それは、一切の秩序派の粉砕とおした行動委の革命的独裁を追求することであり、反乱型「ストライキ」↓占拠の推進である。一切のブルジョア的規約・組合規約にとらわれることなく、行動委を先頭とする大衆の「反乱」型闘争を追求することである。そして、こういった闘いの中で、行動委の武装は、創意工夫をもって克ちとられねばならない。

そして、一方におけるところの、占拠——反乱闘争の質、武装行動委運動の質をもってする地区共闘の質を追求し、闘争の拡大・波及を実体的に克ちとり、占拠ゼネストへ進撃すべく歩みつづけて行かねばならない。地区共闘の中核体たる地区労学行動委は、こういった高次の質を有した闘争を媒介にして、強固な実体として構築されていくのである。

①ロックアウト↓アウシュヴィッツ体制を共産主義武装行動委——労学行動委による遊撃戦と群衆戦の結合で粉砕し更なる大衆反乱へ進撃せよ！

大衆的ストライキ闘争の進撃は、反乱的であれ、組合的なそれであれ、消本の狂暴極まる弾圧体制によって応えらる。処分弾圧・レッドパージの強化・デッチ上げ告訴による官憲への売渡しを一方で着々と行ないつつ、

訓的方向性として、余すところなく吸収しつくされ、更に深化させ、一層高次の質と量へと高められなければならない。

同志・兄弟たち！ 全ての戦士たち！
われわれの進みゆく先は鮮明である。工場占拠へ、二重権力状況の創出へ向けて、武装蜂起・世界革命戦争へ向けて、進撃を続けようではないか！

②労学武装行動委運動を進展せしめよ！
われわれは、労学行動委の大胆な建設を促進するためには、まずその地区的・全体的な攻略目標を設定することから始めるであろう。

ソビエト運動の攻略拠点に対して、行動委総体の強固な地下体制と、それを担い切る組織の質の獲得とおして、大衆の前に登場していくであろう。

武装行動委運動こそ、大衆武装を促進し、それを現在の担うものとして建設されなければならないし、革命的権力闘争（占拠・二重権力・蜂起）の主體的推進を担い、自己権力をうちたてて行く運動として、われわれの革命闘争を担うものである。

そして、われわれは、その主體的推進構造としての「一党一共産主義武装行動委—大衆行動委（連合）」の確固たる創出と発展に向けて、不断の組織建設と、その発展

・強化を克ちとていかねばならぬ。

永続的闘争の展開と、敵権力との攻防戦にかち抜く組織体制と組織の質を獲得することこそ急務であり、全ての行動委は、独自の連絡網・独自の情報網・独自の財政機構・独自の武装方法の確立を基礎に、いわばバルチザンの存在形態をとりつつ、二重権力・蜂起へ向けて闘い抜いていかねばならぬ。

全ての戦士たち！

党——共産主義武行委——行動委（連合）の強固な確立・発展強化へ向けて、前進せよ！

革命的権力闘争を担い切る組織を建設せよ！

全国・全地区に労学武装行動委運動を大胆に登場せしめよ！

破産せる新左翼組合主義者を解体し、労学武行委運動をうち抜け！

(4) 学費値上げ・アウシュヴィッツ体制粉砕を突破口に

革命派全共闘運動を全国に拡大せよ！

同志・兄弟たち！

墮落し、変質した自然発生的全共闘運動と決別し、自

闘争に対応した闘争組織こそ全共闘であり、それは占拠闘争を闘う中で、学生内部の階級闘争、あるいは対国家権力との闘争を貫徹することをおして形成された革命的大衆の大衆的武装組織であり、秩序派大衆、右翼、日共への革命独裁を行うものであり、かかる意味で、日本階級闘争における革命的権力闘争の萌芽的な登場を告げしらせた。

だが、六八年十一月以降、本格的巻き返しに転じた国家権力によって、全共闘反乱大衆は二つの敗北を喫した。

その第一は、六九年一月十八・十九日に始まる学園バリケードへの各個撃破・総攻撃であり、第二は、全都ロックアウト体制による街頭行動への徹底弾圧である。そして、六九年十一月の敗北以降、全共闘運動は無力なものとなり、階級闘争総体は混乱と停滞を続けた。「全共闘連合」は、スケジュール・カンパニアの為の党派間ボス交換機へとすりかえられ、そして又、「街頭主義」反戦も、処分弾圧攻撃の前に沈黙し、せいぜい組合主義的対応を行うにとどまり、反乱はとどめなく後退を続けていった。「左翼」諸派は、なだれをうって、合法的スケジュール闘争へと流れ込んだ。

六九年十一月闘争をもって、六七年秋の羽田闘争に始る七〇年安保をめぐる日本階級闘争の一歴史時代は終っ

然発生的全共闘運動の歴史的成果をスケジュール、カンパニア闘争の喰いものとしていた新左翼、とりわけその「責任ある主流派」中核派を粉砕し解体対象として闘い抜いてきた革命派全共闘運動は、首都圏において、巨大な爆発を克ちとった。我々の、各拠点における二正面作戦の闘いは、一切の秩序派・左翼秩序派を恐怖におののかせた。我々はこの成果を開始された学費総攻撃への反撃をテコとして、全国に拡大し、巨大な革命派全共闘運動の火柱を打ちたてていかねばならない。

労学反乱・革命派全共闘運動をもって、学費総攻撃を粉砕せよ！

ロックアウト・アウシュヴィッツ体制を粉砕せよ！

(a) 革命派全共闘運動の開始と、その到達した地平

(1) 我々は自然発生的全共闘運動をいかにのりこえたか。

六七・六八年前半までの街頭・基地実力闘争が六八年学園占拠闘争へと転化したとき、日本階級闘争の中に、戦後階級闘争の枠をつきやぶった闘いと、それを担う画期的な主体が登場した。六八年学園闘争は、中大学費闘争の大衆的昂揚を過渡的に経ながら、日大全学バリケード闘争の爆発へと突入した。こうした占拠・大衆反乱の

た。この第一段階は、反乱の街頭実力行動を媒介とし、続いて日大を先頭とする大衆の学園占拠闘争、それを基礎とする新宿の大衆的地区占拠闘争へと発展していった。この「占拠」闘争は、全資本主義体制の究極的基礎をなす生産過程の資本家支配に対する根底からの叛逆行為である。それゆえ、国家権力との対決、秩序派との対決を通じた大衆自らの武装を展望し得る。すなわち、占拠闘争こそ、職場・工場を基礎とする大衆武装と、二重権力状況の創出・武装蜂起・帝国主義権力打倒・労働者階級独裁の革命的権力闘争の原点である。

だが、この一歴史時代の第二段階は先にみた二つの敗北を歩んだ。すなわち、バリケードの消極的防衛と、街頭の党派軍団による単純突撃闘争のくり返しによって、敵権力の攻撃の前に屈服させられていった。

かかる二年間の安保階級闘争の推移は日本階級闘争が二つの傾向の相矛盾し葛藤する歴史的過程・歴史的過渡期に突入したことを示した。戦後政治構造の枠内における反政府闘争を革命的権力闘争へ止揚しようとする潮流と、それを阻止し、議会的、組合的反政府闘争の枠内に引きもどそうとする潮流との対立が形成されたのである。こう云った中において、全共闘運動の戦略的意義の確認は何より重要であった。全共闘が、学園占拠を基礎と

する大衆武装組織であり、一切の秩序派への革命独裁を敷くものであると云うことは、権力闘争への歴史的過渡期における「工場占拠—二重力—武装蜂起」の「権力による権力の打倒」の闘いを、不断にブルジョア権力と対決しつつ、自らの権力を形成していく、その推進主体の革命的萌芽であることを意味した。

だが、いうまでもなく、学園の反乱は、社会的には一部の反乱である。占拠反乱は、それが部分的である限り一時的限界にとどまる。しかも学園は、資本の直接の生産過程ではなく、資本主義社会の基本的、究極的基礎はブルジョア社会を社会として存続させる物質的基礎である生産過程の資本家支配にある以上、権力闘争の基軸は近代的労働者階級の職場・工場を基礎とする「占拠—大衆武装」の闘いである。従って、学園全共闘は、それ自身で自己完結的に権力たりうるわけではなく、学園占拠闘争が労働者階級本隊の工場占拠闘争の現実的一翼となり、学園全共闘運動が工場ソビエト運動の一翼となったとき始めて、全社会的な二重権力状況の一方の極として自己を確立し得るであろう。すなわち、全共闘運動の戦略的意義は、それが、労働者・学生権力構築のための闘いを推進していると云うことに存在する。

この様な戦略的意義を踏まえて、我々は全共闘運動を

(b) 今次学費攻撃の特質と、学園階級闘争

(1) 深化する私学危機

今回、開始された学費値上げ収奪攻撃は、その深刻さと全面性において、かつてのそれをはるかにりわまわるものである。

大私学は、高度成長に伴う六二年からの一層本格的な第二次大学生急増期に入ると、私学間、さらに国立大との競争の激化に突き動かされて、すでに学生数の限界にきていたこれら大私学はむしろ施設拡充へ向かわねばならなかった。

そして、さきに急増させた教職員の年功賃金制のあとでの中・老年化に伴う経費の自然増、物価上昇による経費増、それに組合の質上げ攻勢も重なって、これら大私学はいちじろしくふくれあがった経費増を、殆んどすべて学費増の形で、すなわち学先収奪の大巾な強化によって、まかなおうとしたのだ。

一方、当時の中小私学は、すさまじい水増しの急膨張によって、経営的に比較的余裕を生じ、値上げ攻撃も相対的に軽いものであった。

だが、今回の学費攻撃は、大私学から中小私学まで、そして国立大学まで含む、なりふりかまわぬ総攻撃となるであろうし、その攻撃の性格は、私学の死活と存亡を

革命的に再構築するために五月、次の戦術的環を設定した。

それは、

①行動委運動により学園のブルジョア秩序と、学園内部の階級闘争を徹底的に貫徹すること、それによって行動委総武装を獲得すること。

②武装行動委を軸とする学園制圧戦と、学園「人民戦争戦術」による対国家権力闘争を展開すること。

③そして、地区労学行動委を創出し、恒常的な労学反乱を追求していくこと、の諸点であり、それらを通して全共闘革命派連合へと突き進むことであった。

そして、これこそ、自然発生的全共闘運動の挫折をのりこえるべく生み出された目的意識的な革命的な全共闘運動であった。

(2) 革命派全共闘運動の展開

——略、第一報告を参照されたい——

○運動の展開による内部階級闘争の激化

○アウンシェヴィツ体制粉碎の遊撃戦の貫徹と群衆戦との結合—大衆暴動・学園人民戦争(東海大等)

○対秩序派紛争(中核等)を徹底的に推進してきたこと。

かけたものとならざるをえないであろう。

まず、大私学にとっては、中大の学費値上げ撤回以来、二年間にわたって収奪攻撃を中断せざるをえなかったがゆえに、経営状態の悪化はいまやなほはなほだしいものとなっている。

そこで大学理事会は、一方で教職員に対し必死の合理化人べらし労働強化攻撃に出、春闘にも物価上昇をはるかに下まわるベアの回答を押しつけた。

このため、多くは日共が牛耳る大学教職組は、その圧力団体的物とり闘争がゆきづまってマヒし、教職員の中にも、これまでになく不満がウツ積している。

中小私学は、その自転車操作的に短期の借金のころがしによって先行的に校舎建設をおこなってきた。中小私学の大きな部分が、ぼろ大な金利負担にあえぐばかりか、いまや先行不安から銀行融資を引き揚げられはじめている。不渡り手形を出す大学が出はじめている。理事の逃亡もはじまっている。

私学の、この深刻なる経営危機を背景にした私学連盟の再三の請願に対し、文部省は、ようやく、五ヶ年間に人件費の半額補助と云う方針をうちだした。しかし、国家財政そのものの硬直化のために、この案も、大蔵官僚の無慈悲な「修正」をうけ、現実の国庫補助は色あせた

ものであるだろう。

(2) 機動隊戒厳体制Ⅱロックアウト・アウシュヴィッツ下の学費総攻撃

こういった学費攻撃は、当局の警察権力と一体化した弾圧を背景としてすすめられている。

学園全共闘運動を、最終的に押えこんだ、ロックアウト、アウシュヴィッツ体制の「万能」を信じ込む、理事会は、それを伝家の宝刀としつつ、なりふりかまわぬ狂暴な攻撃にのり出している。

自然発生的全共闘は、実体をうしない、カンパニア・スケジュール闘争のための「虚妄」の組織となりさがっている。

これに対して、当局は、「破壊か、値上げか」の二者択一をもって、先制的、攻撃を展開している。

(c) 学費攻撃→アウシュヴィッツ体制を遊撃戦の貫徹と群衆戦の結合で粉碎せよ！

共産主義武行委運動を更に推し進め、全国に革命派全共闘運動を構築せよ！

(1) 学費値上げ攻撃を粉碎せよ！

同志・兄弟たち！ 日本帝国主義の危機は顕在化しつつあり、とりわけ、私学資本は財政的危機を激化させて

喝を加え「秩序」を強制すること、これこそ支配者階級が、最高の有効策と信じ込んでいるところのものである。

たしかに、自然発生的全共闘運動は、それに押さえ込まれ、解体していった。だが、我々は断じてそれを許さない。我々は、東海大反乱の如く、学園人民戦争の爆発をもって、答え続けていくであろう。

同志・兄弟たち！

我々はいまや、革命派全共闘運動を、学費値上げⅡアウシュヴィッツ粉碎闘争を突破口に、全国へ拡大することに着手しなければならぬ。

問題は二重に深刻である。一つには、私学資本自身から展望を持ちえないほどの破滅的経営状態であり、なおかつ、その貫徹が一時的にせよ死活問題となること、そしてそれを完遂するために、帝国主義支配階級は七〇年にむけて強化してきた治安機構を、恒常的な有事出動体制として再編、定着させ、ガードマンを配置し、それを職場・学園のロックアウトⅡアウシュヴィッツ攻撃体制の保障とされていること。そしてそれに自然発生的全共闘運動が砕け散っていったことである。

一方、左翼を自称する部分ですら、この学費→アウシュヴィッツ攻撃の前に全く無力・無気力におちいり、相もかわらずスケジュール・カンパニアによる戦略的展望

いる。私学の経営状況はまさに破滅的なものと云えるのであり、軒なみ数億〜数十億の負債をかかえ込んでいる。「七〇年」をすぎ、私学連盟の言明にある如く、一せいの値上げを開始せんとしている。

かつてない程に大幅、全面的なものとしてある今回の値上げは、だが、学園当局自身が、仮に授業料値上げを成功裡に推進したとしても、それによる収益はせいぜい負債の利子分にあたるぐらいで、以降の学園経営の基本的な展望をも持ちえない程に、その経営状態は、危機的である。

これらの矛盾の転嫁としての労働者・学生に対する攻撃は、私学資本にとって、その存亡にかかわるものであり、我々は彼らの「不退転の決意」をみてとらねばならない。だが、同様に、労学大衆にとって、これ以上の収奪攻撃は、容認できる質のものではない。

日帝ブルジョアジーは、学園における更なる収奪攻撃を、彼ら自身の「全共闘運動」総括であるところの「学園アウシュヴィッツ化」をもって強行し、大衆に対するどろ喝→支配を完遂していかんとしている。学園を「収容所」と化し、国家権力の準治安軍Ⅱ機動隊の暴力を背景に、その先兵としての右翼暴力団・ガードマンによる学内戒厳令の維持を通して、大衆に対して徹底的などろ

を一切放棄したその日ぐらしを続けていることである。

同志・兄弟たち！

我々の解答は、あくまでも解明である。

かかる攻撃に対して、学費攻撃→アウシュヴィッツ体制を粉碎すべく、共産主義武行委の強化をとおして、「第二、第三の東海大反乱」をもってこたえようではないか！そして、工場占拠闘争の大爆発を、労学武装行動委運動の建設、強化の中から、現実のものとして克ちとっていかうではないか！

一切の秩序派を粉碎し、革命独裁を貫徹せよ！

遊撃戦と群衆戦の結合をもって、ロックアウト→アウシュヴィッツ体制粉碎の大衆反乱へ！

共産主義武装行動委の建設、強化を通じ、大衆行動委との連関構造を確立せよ！

(2) 流動制圧を貫徹し、遊撃戦と群衆戦の結合へ！

ロックアウト・アウシュヴィッツを粉碎せよ！

同志・兄弟たち！ 我々の闘いの開始は、行動委による流動制圧戦の先制的開始によるであろう。流動制圧とは、すなわち、一切の秩序派に対する攻撃を開始し、内部階級闘争を貫徹し、支配者の秩序を打ち砕き、階級的大流動を巻き起こし、支配階級を震かんとせしめる闘いである。それは、ありとあらゆる戦術の創造

的發展によって、疾風怒濤の攻撃と、攻撃的対じを貫徹していくことである。

⑥ ⑤として、かかる闘いの貫徹によって生みだされる敵の攻撃の強化、当局——権力、一体となった告訴、レッドパージ攻撃に対しては、大衆行動委の組織化を更に推し進め、同時に遊撃戦の徹底的貫徹によって、敵を追い込むのである。

追いつめられた敵は、「冷却期間」と、対策・対制のためたてなおしのために、ロックアウトへと、さらに追い込まれる。我々は、自らのヘゲモニー下にロックアウトを「引き出す」のであり、闘争がより純化されていくことを確認しなければならぬ。とまどっていた新左翼カンパニア主義者は、その階級の本質を暴露してくるのである。内部階級闘争は徹底的に貫徹されなければならない。何よりもそれは、闘争の歪曲を許さぬ保証である。

⑦ 更に、我々は、機動隊駐留を背景にした、ロックアウト↓検問体制を全面的に粉碎しなければならぬ。連続的な、そして自在の遊撃戦の貫徹によって、粉みじんに敵のもくろみを打ち砕くことができる。ロックアウトは、「はりつめた」ままいつまでも続けることは、そもそも困難なことであり、彼ら自身、非常から「常態」へ、意識的にせよ、無意識的にせよ、回帰せざるをえない。

動を構築せよ！

我々は、かかる学園・職場のプロレタリア階級闘争を主体的に担い、革命へ突きすすむものとして、党——共産主義武行委——大衆行動委の組織的構造の創出と、その不断の強化を為しとげていかねばならない。我々は、革命的権力闘争を担い切り、共産主義を実現しうる党を建設する作業を、更に強力なものとし、そして、ソビエト革命の主体的推進構造の戦略的環である共産主義武行行動委の全国的建設を更に打ちきたえ、強化し、それと大衆行動委（連合）との連関構造を確立しなければならぬ。

そして、大衆行動委を不断に武裝行動委へと高め、共産主義武裝行動委へと結実せしめ、行動委総体のパルチザンの存在形態を更に深く強固なものとしていくことが実践の過程で厳しく問われてくるだろう。

⑤ 既成左翼、新左翼解体闘争を更に推し進め

ソビエト革命の主体的推進構造をわがものとせよ！

党——共産主義武行委——大衆行動委（連合）を確立せよ！

戦士たち！

ない。

⑧ ロックアウトを粉碎されるや、支配者は更に狂暴な弾圧をかけてくる。機動隊駐留——ガードマン配置による検問「収容所」——アウシュヴィッツ体制の出現である。だが、もはや、即自の大衆ですら怒り心頭に達さざるを得ず、大衆反乱の爆発の下地は、いやが上にも形成されている。

⑨ ここに、共産主義武行委——大衆行動委（連合）の組織的準備・計画性を基礎にして、遊撃戦と群衆戦の結合——学園人民戦争が展開されうるのだ。東海大学における一〇・五の、機動性を充分に有した全学行動委連合の遊撃戦の徹底的遂行と、それにつづく一〇・七、一〇・八反乱の成果は、いかにその事を示している。

更に我々は、かかる闘いの展開を通じて、このような革命派全共闘運動の質を有した型態での共闘体制の構築にのりだすであろう。

労学反乱・革命派全共闘は、いまや自壊作用すら起こしている「全国全共闘連合」に対する「敵対者」として自らを形成していくであろう。

⑩ 党——共産主義武行委——大衆行動委（連合）の構造を建設しぬき、全国の学園・工場・地区に労学行動委——地区共闘を支える革命派全共闘運

第一——第四報告にみられる如く、我々の到達しつつある地平は、自然成長性に骨の髄まで浸り切った「左翼」たちとは、本質的に非和解的である。戦後型階級関係——政治構造の枠そのものをブチ壊す地平に、我々は立っている。

そして、とりもなおさずそのことは、我々自身の結合の内実から、その表現形態に到る一切を、基底から問いなおさざるをえない。

たしかに、我々は（第一次）党——組織内革命を宣言し、遂行した。だが、しかし、その内実が、我々自身も含めた「自然成長性」と全面的に闘い、戦後型階級関係をのりこえた位相で、貫徹されてきたといえるものがありえたか。かかる「自然成長性」と、その結合の質（いわゆる新左翼的体質）を根底からぬぐい切る「動力」を有していたのか？

このことの解答は、第二論文において基本的に解明にされているだろう。

（第一次）「党——組織内革命」は、「口先の党から実践の党へ」を鋭く提起し、この当然の事柄を確認してきた。しかし、その成果は、「日和見自己保身分子」の放逐と、その意味で、実践力の形成の下地を作った、といういわば「最低限」の獲得にとどまった。それ自体も。

全組織的に波及させたとはいえず、内なる新左翼体質との闘い、そういった組織の側面との闘いは、未だ不充分といえる。

すなわち、結論的にいえば、第一次「組織革命」自体、新左翼体質の粉碎をいながらも、自らその残滓を一掃する根本的動力を不十分にしかもちえず、旧来よりあるところの「党建設」論の、新左翼との相似性、根本的には同一レベルの党建設イメージから飛躍しきれなかつたことを意味する。(第二報告を読み込んで欲しい。)

かくして、我々は、第二次ともいいうる、組織の根底からの革命——革命の組織建設を大胆に推し進めることを提起する。

我々にとっての「組織建設」とは、新左翼のように、「陣型」を作ると称して、カンパニアと学習会に血道をあげたりすることでは全くないし、ましてや、党建設Ⅱ党派の「防衛」運動なぞではありえない。

我々は、「気ちがいじみた、実践のダイナミズムを通して、「気ちがいじみた」組織の建設を獲得していく。そもそも、それ以外に革命組織「陣型」など獲得されようがないのだ。あたり前のことながら、附言しておく。

我々は、七月八月組織内論争を経て、七〇年後期の「狂気の実践」として、すでに革命の組織を建設する大道

へ踏み込み得た、と確信する。息もつかせぬ激しい闘いの過程で形成されてきた組織力量と教訓にみちた「実践の理論」を、さらに豊富化していくことが必要とされているし、われわれの共武行を軸としたソビエト運動を、全国に拡大・深化し、プロレタリア革命の一大潮流へと押し上げねばならない。

綱領論争、戦略、戦術論争、組織論争を、個々チグハグに「論争」として一般的に展開することのみで、革命組織建設のダイナミズムは獲得されない。革命組織の建設の宣言は、何よりも、一切のブルジョア支配者階級と、その補完物に対する最大の戦闘宣言になるのでなければならぬ。

共武行運動の鉄火の展開こそ、我々の組織建設に、真のダイナミズム——支配階級に対する熾滅戦の開始としての革命組織建設のダイナミズム、を与えてきたものであり、我々は断えることなくそのダイナミズムをわがものとしつつ、前進を続けていくであろう。

我々は、党——共産主義武行委——大衆行動委(連合)という、ソビエト革命の主体的推進構造を強固に創出し、日本プロレタリアートを対米世界革命戦争の前衛として組織し、世界を焼きつくす革命戦争の業火を巻き起し、激化する世界危機をプロレタリア世界革命へと、決定的

に領導していかなければならない。

再度強調すれば、我々は、かかる任務の遂行のために、「青共同」の一般的な強化として訴えることはしない。問題は、あげて党——共武行——行動委(連合)の創出と発展、強化にかかっている。この、ソビエト革命の主体的推進構造たる党——共武行——大衆行動委(連合)は、旧来的な、いわゆるレーニン型の「党——活動家集団——大衆組織」や、あるいは「党——軍——統一戦線」の種々のアテハメとも、決定的に違った位相で定立されている、ということである。

ちなみに云えば、自然発生性に拜きしている経済主義者に対する批判としてのレーニン型の組織形態は、日本新左翼の基本的な組織型態論となってきた。基本的には政治的な意識性の側面でブツたざる「党——活動家集団——大衆組織」という組織形態は、六七・一〇・八から全共闘運動の発展によって、その各党派なりの「位置づけ」を根底から揺さぶられた。我々の、以前提起していた「党——青共同——安共」というパターンも、過渡的な、決定的限界性を有するものだった。(武装五号、山野辺論文参照)

一方、「軍事問題」への解答という意を込めつつ、「党——軍——統一戦線」として、組織形態の再編成をは

かろうとした部分もあった。だが、それらは、実践的・理論的に総破産に陥っている。

彼らにとっては、「軍事」の把握そのものが、根本的には「政治の接木」としての軍事でしかなく、ブルジョア軍事論の枠内から一歩も出てはいない。したがって「軍」の規定がなしえず、「正規軍」だと答えてはみたものの、その存在根拠・存在形態・結合の内実を一切明らかにできず、せいぜいブルジョア軍隊的なそれに「イデオロギー」を注入した「プロレタリア軍隊」(!?)を夢想するのが関の山なのである。これらに対する批判は、稿を改めて行ないたいが、共産主義論、戦略論とりわけ権力論を措定しえず、基本的に「いかなる革命をいかにして為すか」を把えきれない諸君は、結果としては、クーデター革命論か、底なしの日和見主義路線か、いざれかに転落するのが結果である。落ち行く先は、「ファシストの軍隊」と「社民」として「予言」される。

同志・兄弟たち!

階級戦争の戦士たち!

混乱する日本新左翼の階級的位置そのものをはつきりと見すえ、我々と共に一切の秩序派に対する解体闘争の開始をとおして、党——共産主義武行委——行動委(連合)の確立に全精力を投入せよ!

第二次組織革命を開始し、プロレタリア世界革命の前進を日本の地に於て、まずもって組織していかうではないか！

共武行運動の実践的展開と、全国戦闘組織の確立をわがものとし、革命党の建設を推進せよ！

行動委総体のバルチザンの存在形態を更に強化し、鉄のバルチザンを建設し、右翼・秩序派を粉碎せよ！

プロレタリア革命の障害物に既成左翼・新左翼を解体し、工場占拠——二重権力——武装蜂起、世界革命戦争の勝利へ攻めのぼれ！

第二部

組合主義労働運動の解体から 工場・職場行動委員会運動へ

——「反戦」派労働運動批判——

青 共 同 全 連 委 員 会

一、戦後型階級闘争の破綻と

組合主義労働運動の崩壊

労働運動の視点からみた六〇年安保闘争と七〇年安保闘争の質的区別は、前者が組合主義労働運動の基礎の上に立って闘われたのに対し、後者は、まさにその崩壊過程に展開されたという点にあるだろう。

六〇年安保闘争は、組合主義労働運動を基礎に、全体としては、議会内闘争と街頭反政府行動として闘われた。

六〇年安保の敗北後、戦後帝国主義世界体制の崩壊・世界危機の開始とともに、日本帝国主義支配階級は、重化学工業部門を筆頭とする新たな合理化・労働強化の攻勢に転じた。

これに対して、戦後型—組合主義労働運動は、すでに

六〇年にいたる過程で総評が内部の「戦闘的」組合主義グループを孤立化させ、三井三池を最後に大巾な後退をとげていたが、こうした資本の攻勢の前に一層屈服を重ね、若干の賃上げを取引材料にしながら、合理化を許容して、その結集力を喪失しつづけてきたのである。

したがって、七〇年安保闘争は、そのような五〇年代からひきつがれた組合主義労働運動とそれを基礎とした社・共の議会主義的カンパニア行動の大巾な後退の過程で闘われた。六七年の羽田闘争をきっかけとし、それはいわゆる新左翼諸派の率いる全学連・反戦を中心とした街頭反政府行動の急進的展開を基調とするものであった。そして、組合主義労働運動の破綻によって分離した下部労働者が、そうした街頭行動において「反戦」や「ベ平連」などの市民団体へと結集する形をとったのである。

だが、この街頭反政府行動は、その展開過程に——それとは異質の——革命的権力闘争の萌芽——すなわち、学園占拠・全共闘運動と都市密集点の占拠・都市反乱闘争——を生み出しながらも、総体としては、六八年の一一・九を転換点とし、六九年の四・二八―一〇、一一月闘争において最終的に示されたように、街頭急進運動の破産を宣言したのであった。

それゆえ、七〇年安保闘争の敗北は、六〇年代前半の組合主義労働運動の破綻と、後半の（新左翼諸派による）街頭反政府闘争の急進運動自身の敗北とによって、結局戦後型階級闘争の総体的破産をもって終えんしたことを意味している。

しかも、階級情勢の客観的推移は、昨七〇年をとおし、ますます厳しい段階へと突入していることを知らなければならぬ。

七〇年に入り、日本帝国主義の経済体制はその深刻な矛盾を露呈した。第一に、それはアメリカ帝国主義との矛盾の拡大としてあらわれ、第二には、それを媒介にして、新たに「ヨーロッパ型」不況の開始としてあらわれ

てくる。
まず、日本帝国主義の戦後体制を基底において支えてきた「高度成長経済」は、五〇年代後半から六〇年代の

最初にいたるまでのいわゆる「設備投資主導型」と、六〇年代後半からの「輸出主導型」に区分しうるであろう。前者は、ドル・ポンドの国際通貨体制の相対的な安定を基礎に、大巾なドル外資を導入して設備投資を拡大するものであった。それに対し、後者は、すでにドル・ポンドの動揺が深化していく中で、むしろ生産力水準の高度化とカルテル価格、ダンピング輸出によって、特定の戦略産業の強行的な対米輸出を軸に生産の拡大をはかってきたものと言えよう。

ところが、アメリカ帝国主義は、こうした日本・ヨーロッパの発展・ドル体制の崩壊と国際競争の激化、および、ベトナム解放革命戦争の永続的展開に直面し、ニクソン政権登場後、その世界政策の転換、国内経済の転換へと向いはじめた。それは具体的には、日本帝国主義に対するアジア防衛体制の再編要請とともに、保護貿易主義的な輸入制限として打出されてきている。

現在、日本の鉄鋼・自動車・電機等の産業は軒なみに国内需要の停滞と対米輸出不振に直面して、むしろ、生産調整。縮少へと陥っている。しかも、企業への構造的な財政支出は拡大の一途をたどり、インフレーションは引きつづいており、いわゆる欧米型の「不況下インフレ」となっているのだ。

このことは、日本の労働者階級に対して、次のことを意味している。国際競争の激化と主要産業の不況、雇用手率の停滞・低下は、ますます資本の合理化・労働強化（監視労働・労働時間の延長等）をもたらす。また、インフレーションの拡大は、労働賃金の実質的低下をもたらさざるをえないであろう。

こうして、階級情勢の客観的推移は、組合主義労働運動の余地をいっそうせばめているのであり、今や、組合官僚の唯一の存続の道は、企業秩序の防衛隊Ⅱ第二の職制としてたちふるまうこと以外になくなってきているのである。

そして、われわれに問われているのは、こうした組合主義労働運動を解体して真のノンビエト運動を構築するため、組合政治の街頭急進版として結集されてきた「反戦」派労働運動を解体し、工場・職場行動委員会運動の実体的展望をさし示すことであろう。

二、「反戦」派労働運動の位置

(1) 反戦青年委の本質と歴史的限界

はじめに

日韓闘争の当時、社会党、総評青対部の指導の下で創り出された大衆的青年労働者組織——即ち、「反戦青年委」（以下反戦と略す）は六七年―六九年の安保階級闘争を果敢に展開してきた。そして、その反戦が七〇年代階級闘争に対して混迷し、あるいは、闘争からの回避をはじめている。

反戦は安保階級闘争に、その階級的位置の重要な存在であった。その反戦が今何故、こうした状態にあるのか。何故に「思い出左翼」として現実の戦線から逃亡しようとしているのか。あるいは、待機主義的な政策阻止闘争にすぎているのか。

七〇年代権力闘争に向けて何故決起する事が出来得ないのか。
実は、こうした疑問は、反戦発生その時からの反戦の一貫した階級的性格であった。ではその階級的性格は如何なるものであり、又階級闘争はどのように総括されなければならないか。

a、既成指導部と民主主義イデオロギー

日韓闘争敗北以降に一時姿を消した反戦は六七年砂川闘争を契機にして再びその姿を現わした。

その時、まだ社会党、総評の指導下にあった反戦は上

部（既成指導部）の動員体制の性格を持っていたし、又持たざるをえないものとして位置付けられる。何故か、

戦後体制は文字通り、社会、総評、民同の労資協調制のブルジョアデモクラシーのイデオロギーの支配のもとでの妥協闘争であった。その上部指導方針によって反戦は削り出されて来たのであり、早く言えば、カンパニア圧力闘争への動員の組織としてであった。かつまた、結果する労働者も同時にそうしたイデオロギーの支配のもとで闘争に参加して来た。しかもそればかりではなく、結果要因となったのは、決定的に、上部の犠牲対策が完全であったからに他ならない。逮捕され、あるいは会社から解雇されたとしても「上部の責任」による生活への安心感を持つ事が出来たからであり、この事は、正に、ブルジョアイデオロギーのもとでの「反戦、平和」への闘争参加である。たしかにことばの上での「革命」的主体や理念上の「権力」闘争はありえたとしても、当時の闘争形態からすれば、容易に闘争に参加出来、「上部の責任」があるために、当然にも上からの動員の組織としての性格を持たざるをえなかったのである。上部も又動揺する組合結集を補完するために、そうしたものとして位置付けていた。

この事が最初から今日までの反戦の混迷状態への根源

である。

同時に大衆自身が上部に対しての幻想を常に持っていたからである。何故ならば、上部は、スケジュール的、一時的であれ、一定程度の取引闘争を展開し、それをもって大衆を結集させて、組織体制を保持して来たからである。だから、反戦が一定の街頭実力闘争を展開するようになり発展して来た時、結集した大衆には、少なくとも、独自の意識性が問われて来たのであった。

。大衆的反戦から党派反戦へ

一方、地区反戦は、新左翼諸党派との組織関係を徐々に明白にして来た。街頭闘争は、当然、新左翼党派相互のボス交方針と上部との指導方針とのかみ合わせた闘争形態であった。

反戦の最大の長所は自由に参加する事が出来るという事であった。

だが、労組とは組織的性格も違ひ、新左翼諸派との組織関係が地区的に明白になるにつれて、上部は勿論、大衆自身もこれまでと違って反戦に対し、回避するようになつて来た。又、既に反戦は、分断化され、しかもその反戦が、党派の私物化となり、党派的位置付けによる闘争を展開するまでに至つた事である。

としてあった。

だが、こうした内容とは別に、否、こうした内容であったからこそ、反戦は膨大に結集してきたのである。

り、前段階における既成指導部と反戦との関係

上部の動員の組織としての性格を持ちながらも、反戦は砂川闘争から羽田闘争を契機として、地区反戦として組織体制を進めて来た。当然、職場反戦としても公然の立場に立つ事も出来た。そこには地区一職場という闘争組織関係をも持つ事が出来、反戦は拡大、発展し、文字通りの大衆的組織となつてきた。だが、それは全く独自の闘争関係を持つという事ではなく、常に街頭闘争におけるところのみにとどまつたのである。しかもその街頭闘争さえも全国反戦等とおして、上部の指導方針をある程度受け入れなければならなかった。

確かに労組動員と反戦動員の二通りのデモ形態は出来ても、それは、戦闘的カンパニア行動部隊としてとどまっていたのである。

何故か、それは権力と当局からの攻撃にあつた時、常に生活への安心感を求めていたからに他ならなかったのである。

従つて、事務的には常に上部との上下関係は続いたの

この時点から、党派反戦として単独の動員と単独闘争を展開し始める。

こうした現象に対し、上部民同は、反戦に対しての、犠牲資金援助停止という形でどう喝を開始しはじめた。このことによつて反戦は、党派反戦として個別化を免がれる事は出来なくなる。

階級の位置からすればこの時こそ、反戦の最も鋭く問われた時期である。文字通り、小市民的な先鋭的闘争組織から革命的闘争主体へと転化しなければならなかったのである。だが街頭闘争に於いて実力闘争を展開する時に果してその様に闘つたのであったらどうするか。

ここに反戦―党派反戦自身の最大の矛盾を明白に提起する事になつたのである。

d、内部階級闘争の回避

民間官僚は六八年後半より、公然と「反戦派―マジ」を開始し、「反安保実行委」に反戦派を巻き込もうと、当局とのボス交を背景に弾圧をかけてきた。この弾圧は最初に個別職場より着手されてきたのである。問題は直接ここに存在した。

街頭に於ける闘いは、既成指導部の方針とは関係なく実力闘争を展開しながらも、かつまた、民間官僚を徹底

的に批判しながらも、職場に於いては、その革命的主体性を民間官僚のどり喝と当局からのどり喝に日和り、民間の取引闘争の行動部隊、あるいは戦術突き上げ部隊としか位置する事が出来なくなつたのである。ここに反戦メンバーの個人的主体性に矛盾が発生せざるをえなかつたのである。

街頭に於ける論理性と行動は職場に於ける論理性と行動とは、相反した形となつたのであり、且つ又、この相対的コンビネーションの展望さえ見出す事が出来なかつたのである。何故、相反した行動を取つたのか。

実は、職場に帰つた時、個人的に数人的になつた反戦派は、民間のどり喝と当局からの弾圧がかけられ、これのみばかりではなく、大衆的意識性に迎合するという戦後体制への執着が前提的に内在していたからである。

即ち最初の民間官僚に対しての期待と幻想の大衆的次元の意識性から行動的に先鋭していたにすぎなかつたのである。その事が街頭へと現われていたにすぎない。これが主体的な敗北の要因としてあつた。

が、一方、新左翼諸派も、これをまた決定的に組合官僚戦後体制との決別・暴力的粉砕の方針と展望を見出す事が出来なかつたのである。そして、民間の行動的左翼として自己を位置付けて、問われた内部階級闘争から逃

避し、反戦派組織防衛政策に走つたのである。

②、安保階級闘争と反戦の限界

従つて、安保階級闘争で問われた課題は、原則的には日本支配者階級に対しての闘いではあるが、とり訳、反戦派がそうしたプロレタリア叛乱を職場、地区に目的意識的に追及した時、基本的には、内部の敵との実力対決が、職場、街頭に於いて展開されなければならなかつたのであつた。

だが、その一切から逃亡し、安保決戦は、街頭実力闘争へと動員され破産を告げたのである。

この事を言いかえるならば、社共、総評の反政府政策阻止カンパニア闘争の街頭実力版としてしかなかつたのである。

この安保闘争が敗北を告げた事によつて、反戦派と称する部分は職場に於いて為すべき展望とその行動を見失ない、迫られた自己の主体的存在が正面から大衆的に問われた時、内的矛盾を爆発せざるをえなかつた。

最初からにして歴史的限界の性格をもつてつづられた反戦は、行動的には成長しつつもその自己の主体性が問われた時、部分的な活動家を残しては、戦線から逃亡するのである。

だが、完全に消え去つた訳ではない。権力の攻撃が文字通り強化されている現在、自己の内的葛藤の闘いと、革命的闘争への展望の不明なゆえに拡散しているだけであり、大衆自身も同時に、叛乱の要素を絶えず内包しているのである。

では反戦運動から次に何が問われているのか。そしてその反乱の要素を如何にして行動へと転化させるのか。この事が全ての闘う労働者に問われているのである。

正にそれは権力闘争への接近をなすしる唯一の運動——行動委員会運動である。では革命的行動委運動の階級性は何であるのか。

(2) 組合内反対派——急進組合主義路線

一口に、「反戦派」労働運動と言っても、職場、生産点における、体系的で首尾一貫した路線や方針が定まつているわけではない。その多くは、むしろ、経験主義的な活動——サークル的活動や組合内左派フラクション活動——として存在しているであろう。

最近、職場における既成指導部の動揺と流動化が進む中から、ようやく新左翼諸派の労働戦線に関する路線がいくつか提出されてきているが、それらは、およそ次の

ような内容となつている。それは、「労働運動の帝国主義的再編 主に戦線統一派のたい頭」に抗して、組合内の左翼反対派の統一戦線をつくり、それを通して自らの部隊を結集して、急進的・革命的「労働組合としての指導権を握っていく」というものである。つまりは、当面、反戦派の力量の弱いところ 実際それぞれ職場ではそうした少数派であることが圧倒的に多いわけだが、では戦後民主主義体制の中で獲得された「啓」としての「戦闘的」労働組合を防衛するために、それを果しえなかつた社民左派をつきあげつつ、それと共闘していくこと、そして、すでに組合の指導権を握れるところ、あるいは、(目標としての)それを達成した時点で、「本来の」急進的・戦闘的・革命的労働組合運動を担っていくことが現段階での「反戦派」労働運動の路線と言えよう。

最近の具体的な闘争に即してみると、例えば全造船石川島分会の脱退問題をめぐる総括を、革共同中核派は次のように述べている。

彼らは、「石川島分会の存続が、反戦派の決起によつて開始され、社会党の合流によつて完成した」ことを、「反戦派労働運動の数少ない成果」であると高く評価している。そして、今後の民間基幹産業における反戦派運

動への教訓として、「全造船本部の(本部)指令による分會存続を断固としてやること」、「社会党や全造船の対応が遅すぎたこと」、「組合の合法性を、合法性の革命的獲得によって確立すること」等々を掲げている。

この主張には、はっきりと「一組防衛」とそのための「社民との統一戦線」という彼らの路線が具体的に示されているであろう。ここでまず問題となる点は、彼ら自身も認めるように、「防衛すべき」組合が、すでに社民や日共の手によって、多くの労働者にとっては、「命がけで守るに価する実感」をもたない代物ではないにもかかわらず、この「一組防衛・統一戦線」路線では、その限界がまったく浮きぼりにされず、逆に社民への追及が不問に付され、隠蔽されている。そして同盟組合より、よりよい組合としての「防衛」という思考様式は、すでに人民戦線型の悪しき屈服への第一歩を踏みだしていることを知らなければならぬ。だから、彼らの「教訓」は組合幹部のとるべき組合戦術のあれこれの教訓ではないし、社民との統一戦線組合が、果して、今日打出されている資本の苛酷な攻勢に対して、いかなる闘争形態と闘争主体を創出するのかは、全く提出しえないのである。そして、最終的に展望されているのは、長崎造船の第三組合のごとき「少数左派産別組合」としての運

動であって、あるべき労働組合のわくを一步も出ていないものでしかない。そこにはわれわれの直面している戦後型。組合主義労働運動の総破産を根底的にふみこえる職場反乱・工場占拠を担う全く新たな闘争主体の形成・ソビエト運動構築への教訓は一かけらも存在していないのだ。

一方、革共同の革マル派は、さらにえげつなく「組合内反対派」路線に徹している。自派以外の新左翼を「ハミダシ」諸派と称しているような彼らには、もともと組合主義労働運動を革命的に突破していく気など毛頭もち合わせていないのである。

革マル派が動労においてそうした徹底的な組合内反対派戦術によって組合官僚と癒着しつつ勢力拡張をはかっていたことは周知の事実となっているが、最近、彼らが最も力を入れているといわれる全通に関しても事態は全く同様である。

例によって彼らは、全通戦線の諸勢力を並べたて「このとば」の批判をあげつらいながら、しかし実際には、特有のプラグマティックな囲い込みをはかるため、弱いところでは組合官僚に対しても恭順の意を表し、勧告・統制処分にも沈黙を守り、多少有利なところでは(反対派区別が、わずかに、大衆的運動の中からか、それとも上からか、という程にしかなされなまま混然となつていくのだ。

以上、確認してきたように、現在の「反戦」派労働運動の「組合内反対派」急進組合主義」路線は、諸派のなかにさまざまな力点の差異をもちながらも、全体として萌芽を開始した組合主義労働運動の域を出ていないこと、したがって、事実上彼らも戦後型階級闘争の副産物としての左翼的補完物としての位置を占めているにすぎないこと、そして、同じく戦後型の街頭闘争の急進的展開を敗北に導いた彼らが、ふたたびそれを職場・工場の組合主義労働運動で演じようとしていることをはっきりと把握、これとの党派闘争なくして、プロレタリア権力闘争を真に担う党の建設はありえない点をあらためて確認しなければならぬであろう。

三一切の組合主義潮流を解体し、

職場反乱・工場占拠の行動委員会運動へ！

同志諸君！ 現時点にあって問題は簡単明瞭となつていく。崩壊を開始している組合主義労働運動に対し、さ

のワクを越えない程度に)組合官僚に圧力を加えるというのが実状だ。だから、彼ら革マル派が、「宝樹のラッパと裏切りを許さず」といふ、「戦闘的」休暇闘争や「圧倒的」物ダメを主張しても、彼らの運動の実体は、彼らの主張自身がラッパにすぎないことを示している。

そして、今日、われわれに問われているのは、おどろおどろしい「宣伝文句」や、全通労働運動の「戦闘的再生」などでは決してなく、組合主義潮流を行動によって解体していく実体的な闘いなのである。

また、社青同解放派も、現在、労働戦線の任務として「ゲリラ戦の展開」と「革命的労働組合の生み直し」と称する方針を提出しはじめている。

だが、一体、「ゲリラ戦」なるものを何に向けて展開せよ、と言うのか。それを担う主体は組合内反対派であるのか否か。こうした最も基本的なことがら、故意にか無意識のうちにか、全く触れられていない。

しかも、彼らの目標も「革命的労働組合」の獲得であって、労働者を私的個人の契約関係として結合させる「組合」そのものの本質的性格を把握していないため、官僚支配の組合に、あるべき「組合」をばくぜんと対置させるにとどまっている。それゆえ、赤色労働組合運動との

まさまな「左翼」的縫策にしがみつ一つ一緒に沼地へ落ちこんでいくのか、それともそうした「組合」的制約から労働者階級を解放し、職場・工場を基礎とした真の権力闘争の発現に向って、大衆の工場占拠闘争への道をふみ出すのか、という問題がつきつけられているのである。そして、われわれは、断固として後者の道を歩みださなければならぬであろう。

それは具体的にどのような展開されるのか。

われわれが第一に着手しなければならないのは、行動委員会運動の組織化と自立化である。

もちろん、これは、なにか新奇な運動や組織を發明して流しこむことではない。

現実には、職制の支配秩序と強制に対し、職場・生産点における労働者の日常的な反抗、抵抗と反逆が存在している。行動委員会の組織化とは、まずもって、それを発見し、それに目的意識性を与え、組織し発展させることから開始されなければならない。

だが、一般的には、こうした労働者の抵抗や不満は、組合的運動へと解消され、最大公約数的な一致や組合上部による取引へと流されていくであろう。また、組合官僚の物質的基盤は、まさにこの点にこそ存在している。そして、先進的労働者の反抗が突出しようとしたなら

ば、組合は、第二の職制としてそれを抑圧し統制するであろう。

したがって、われわれが、行動委員会運動を自立させるためには、職制支配に対する職場反乱を、闘争体として組織的に闘う中で、組合官僚・組合主義潮流との党派闘争・実力対決を推し進めていかなければならない。

われわれは、第二に、こうした行動委員会によって、職場の流動制圧戦を掘りおこし、その遊撃的展開をおおして波及させ、全工場の規模に拡大し、あるいは、工場をおしつむいくつかの職場の制圧戦を構築することを追求し、工場占拠闘争をうち抜く闘いへと発展させることである。

そして、当然にも、職制の麻痺から介入を狙う国家権力に対し、工場占拠の武装示威、諸職場・学園流動制圧戦との結合、地区―工場人民戦争をもって応えなければならないであろう。

われわれは、第三に、かかるプロレタリア権力闘争を保障するためには、この工場占拠ゼネストから、二重権力、武装蜂起―国内階級戦争・世界革命戦争に至るまでの全過程に向けて、一貫した目的意識的な担い手であり指導部である党を必要とする。その有機的一環として、地区の工場占拠ゼネストを貫徹する戦線配置と計画が緻

密に検討されなければならない。そして、その戦線配置と計画の下に、一人でも遊撃戦を展開し、大衆行動委員会を組織し、それらを工場占拠闘争に向けて結合させ、一切の組合官僚・左翼組合主義者を粉碎していく任務をもった、党とその共産主義武装行動委員会を職場・工場に確立する必要がある。また、その任務を果す組織へとわれわれ自身を不断に革命し再編しなければならぬ。

同志諸君！われわれは、みずからにそうした任務を課し、新たな闘いへと突き進むであろう。

武 装

バック・ナンバー有り

NO 2

○工場占拠ゼネスト・二重権力武装蜂起

NO 3

○反政府実力闘争から革命的権力闘争へ

(他 4 論文)

NO 4

○階級闘争の現段階と反乱闘争の戦略的意義

(他 4 論文)

NO 5

○共産主義武装行動委を建設せよ！

—— 青共同の位置と任務 ——

(他 4 論文)

問い合わせは前衛社まで (残部なし)

武装第六号

発行日 一九七一年三月三日

発行 青年共産同盟

定価二〇〇円

